

シャーウッド・アンダソンの女性観  
( Sherwood Anderson's View of Women )

太田久江

SUMMARY

It was not until I was in my third year at the university that I knew the name of Sherwood Anderson, who was an American writer. For the first time in my life, I read his work "Loneliness." At that time, I thought how strange the story was! It was difficult for me to understand the story. As I read some of his works, however, I have been fascinated with his naivete.

At first, when we talk about Sherwood Anderson, it is necessary to know his life. In his case, his works are always closely related to his real life. In the first chapter, I want to deal with his life.

Secondarily, the country town Clyde where Sherwood Anderson spent his young days is very important to him. For, in his young days, the town changed very much as well as some other towns in America changed. I want to state the circumstances of Clyde in the second chapter.

The third chapter, it is the most important part in this dissertation. Most critics treat of the style of Sherwood Anderson and the problem of the "grotesque." As I read his works, however, I have come to hold one question: what ideas of women did on earth Sherwood Anderson have? Through his some works, I want to analyze his view of women as much as I can.

Sherwood Anderson was neither a writer who wrote his works by using his head, nor a writer who wrote them by looking into some facts in the society. I think that he felt an inferiority complex about his own lack of education, but to the contrary, I also think that he had a self-confidence that there was something no one except him could write. And also, he regarded "imagination" as the most important element in the creative activities. So, when he met some materials which stimulated his own imagination, his right hand with a pen started acting vigorously.

He was interested in the inner world of many people who experienced a crisis at the turn of the century. I tried to deepen my understanding of American literature by studying his life and works.

## 目 次

序

第1章 人と生涯

第2章 クライドという町

第3章 シャーウッド・アンダソンの女性観

§ 1 「森の中での死」を中心に

§ 2 『ワインズバーグ・オハイオ』の女性達

§ 3 実生活における女性達

結 語

使用テキスト・参考文献

## 序

シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1941) の作品に初めて私が出会ったのは、大学三年生になったばかりの頃である。正直なところ、それまで、彼の代表作どころかシャーウッド・アンダソンという名前すら知らなかった。なぜなら、イギリス文学においてはチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870)、アメリカ文学においてはアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) といった世間的に著名度の高い作家達ほど、アンダソンは有名ではないからである。(もちろん、私自身の知識不足や不勉強さも多分にその原因となっているのは明らかである。) 講義内でまず第一に教材として取り上げられたのは、『ワインズバーグ・オハイオ』(Winesburg, Ohio, 1919) の中のエピソードの一つである「孤独」("Loneliness")であった。一読した時、何とも訳のわからない語だと思ったのが実際のところである。しかも、いわゆる通俗小説的な要素も含まれていなかっただけに、全くおもしろくないという印象しか得ることができなかった。ところが、同じ『ワインズバーグ・オハイオ』の中の他のエピソード——例えば、「手」("Hands")、「紙玉」("Paper Pills")、「母親」("Mother")など——を読むにつれて、おぼろげながらも、一つの共通した要素、あるいはテーマというものが存在しているのではないかということが、私の頭の中に浮かび上がってきたのである。そして更に、『卵の勝利』(The Triumph of the Egg, 1921) の中の「卵」("Egg")や『森の中での死』(Death in the Woods and Other Stories, 1933) というような作品に触れて行くにつれ、アンダソンの心の奥に潜んでいるある種の純粹さ、素朴さというものに、次第に強く引き付けられていった。

こうして、シャーウッド・アンダソンについてもっと深く研究してみたいと思うに至ったのである。まず手始めとして、彼に関する参考書、種々様々な批評論文、あるいは自伝といったものを熟読し、検討してみた。すると、いろいろな事柄——アンダソン自身の生

い立ち、彼が生き抜いてきた当時のアメリカ社会、その社会に生きる人々の慣習や宗教観念などが、目に見えてきたのである。しかも、こうした様々な要素を念頭において、再び『ワインズバーグ・オハイオ』を読み返してみると、今度は、以前よりもはるかに明瞭に、作者アンダソンの意図しようとしているものが伝わってくるように感じられる。そうして、最も私自身の興味をそそったことは、アンダソンが女性をいかに捉え、どう考えていたのかという問題となったのである。アンダソンを取り巻いていた女性達——母を第一として、妻、姉、娘、その他の女性達——が、彼の作家としての生活に、あるいは、彼の人間形成や人生にどのような影響を与えたのだろうか。更には、これらの女性達が、自らの体験を基盤として物語を描くのに得意であった彼の作品の中で、どのように映し出され、表現されているのだろうか。逆に、彼の作品中に登場してくる女性達は、いったい作者のどのような意図のもとに現れてくるのだろうか。

このようなアンダソンの女性観ともいべき問題を、彼の代表作である『ワインズバーグ・オハイオ』を中心として、私なりに探り、研究し、論じてみたい。そうすることで、少しでも、シャーウッド・アンダソンという一人のアメリカ作家の真髓に迫りたいと思った。

## 第1章 人と生涯

『ワインズバーグ・オハイオ』の作者シャーウッド・アンダソンは、1876年9月13日に、アメリカ中西部オハイオ（Ohio）州の南東部のインディアナ（Indiana）州との州境に近い小さな田舎町カムデン（Camden）で生まれた。彼の父のアーウィン・マクレイン・アンダソン（Irwin McClain Anderson）は、南北戦争に従軍した経歴を持ち、その体験を活かして、馬具商を営んでいた。母のエマ・スミス・アンダソン（Emma Smith Anderson）は、不幸な境遇に生まれ育った人であったが、1873年3月11日、20歳の時に、アーウィンと結婚した。この夫妻の三番目の子がシャーウッドであり、兄のカール（Karl Anderson）、姉のステラ（Stella Anderson）がすでに上にいた。この父と母は、シャーウッドの多くの作品の中で、重要な位置を占めている。

一家は裕福ではなかったが、決して「貧乏白人」（Poor white）と呼ばれるほど貧乏であったのではない。ところが、近代工業の波に遭遇し、ひとたまりもなく馬具商は倒産してしまった。夜逃げ同然の姿で村を脱出し、仕事のありそうな場所を求めて転々とし、数年にわたる放浪の後、オハイオ州中北部の小さな町クライド（Clyde）に落ち着いて、塗装業を営むようになった。こうした時代の移り変わりについて行けずに、虐げられていく父を初めとする人々の姿が、幼いシャーウッドの心にも、無意識のうちに何か深い傷を残したことは否定できない。なぜなら、後に彼が作家となった時に、この頃の思いがよく彼の頭をよぎっているからである。

当時の父について、アンダソンは自伝的作品『物語作者の物語』(A Story Teller's Story, 1924)の中で、次のように述べている。

My father, a ruined dandy from the South, had been reduced to keeping a small harness repair shop and, when that failed, he became ostensibly a house and barn painter. However, he did not call himself a house painter. The idea was not flashy enough for him. He called himself a "sign writer." (1)

父のアーウィンは気位が高かったようだ。また、楽天家で、ほら吹きで、酒飲みで、働く意欲はなく、おまけに放浪癖が強かった。気に入った馬を見つけると、それが誰の所有であっても、その馬に乗って、仕事の途中でかまわず「冒険」と称して行方をくらませ、数日にわたって家をあけることもしばしばだった。要するに、よく西部劇に登場してくる「流れ者」のように装っていたのである。しかし、何よりもアーウィンが好んだことは、人に話を聞かせてやること、殊に、自らの戦争体験を巧みに話すことだったようである。

As we waited in the wood he sometimes told us a story of the Civil War and how he, with a companion, had crept for days and nights through an enemy country at the risk of their lives. (2)

アーウィンの渾名は、“Major”あるいは“Jobby”といい、話術の巧みさは、天性のものがあり、共和党の強い当時のその地方において、彼は熱烈な民主党员であった。こうした父の話しぶりが、作家としてのシャーウッドに多大な影響を与えたことは、言うまでもないだろう。

このように、仕事もろくにせず、酒とおしゃべりが好きで、放浪癖の強い父であっただけに、母が一家を支える重荷を負わねばならなかった。彼女は瘦せた背の高い女性であり、無口な働き者で、内職——近所の洗濯物を引き受けること——をしながら、次々に生まれる七人の子供を育て、過労のために1895年5月、43歳という若さで没している。この母とシャーウッドとの関係には非常に興味深いものがあるが、その問題については、後の第3章でもっと詳しく論じてみたいと思う。

母の死後も父は相変わらずで、結局、一家は離散の道を辿らなければならなかった。そこでアンダソンは、幼い弟とシカゴ(Chicago)に移った。ここでは、リンゴ樽を地下室に運ぶ仕事をして自活し、弟を養っていたのだが、この生活から脱出するため、また高給が得られるということで軍隊に入り、米西戦争に従軍した。戦後シカゴに戻ると、幸運も手伝って、広告代理店に勤めるようになったのである。当時のいわば花形産業であり、ダンロップ・タイヤ(Dunlop Tire)の広告を一手に引き受けることとなり、1904年5月16日、28歳の時、コーニーリア・レイン(Cornelia Lane)と結婚した。

コーニーリアはオハイオ州トリードー(Toledo)出身の、裕福な靴問屋の娘で、大学出の教養ある女性であった。殊に文芸への関心が強く、大学卒業後はヨーロッパにも留学し

ており、フランス語が達者であった。全くタイプの異なる両者であっただけに、互いに引き付け合うところがあったのだろう。

1906年9月、彼はオハイオ州クリーヴランド（Cleveland）に移った。そして翌年の夏に長男のロバート・レイン・アンダソン（Robert Lane Anderson）が生まれた頃から、広告業者から、自身の文才を活かして、墨根用塗料の通信販売会社を始め、30代半ばに経営者として成功するに至ったのである。翌1908年暮には、次男のジョン・シャーウッド・アンダソン（John Sherwood Anderson）、続いて1911年10月には、長女のマリオン・アンダソン（Marion Anderson）が生まれた。こうしてアンダソンは、実業家としての豊かな生活や財力、一人の家庭人としての幸福な生活を楽しんでいた。

ところが、この頃からアンダソンの内部では、急激に大きな危険が湧き起こりつつあった。実業家としての単調な生活は、少年時代からの作家になりたいという夢を押し潰すもののように思えてきたのであった。そしてついに、1912年12月、36歳の時に、神経衰弱にかかっていた彼は、秘書に商業文の口述を行っている最中、突然口述を打ち切って、作家になるための家出をやったのけたのである。

Again I laughed as I walked lightly toward the door and out of a long and tangled phase of my life, out of the door of buying and selling, out of the door of affairs. "They want me to be a 'nut,' will love to think of me as a 'nut,' and why not? It may just be that's what I am," I thought gayly and at the same time turned and said a final confusing sentence to the woman who now stared at me in speechless amazement. "My feet are cold wet and heavy from long wading in a river. Now I shall go walk on dry land," I said and as I passed out at the door a delicious thought came. "Oh, you little tricky words, you are my brothers. It is you, not myself, have lifted me over this threshold. It is you who have dared give me a hand. For the rest of my life I will be a servant to you," I whispered to myself, as I went along a spur of railroad track, over a bridge, out of a town and out of that phase of my life. (3)

放浪癖の強かった父の子アンダソンが、突然の家出の道を選択したのは、興味深い問題であろう。しかし、このエピソードの背後にあるのは、事業家としての生活に巻き込まれているうちに、見失った自分を再発見しようという情熱である。

1913年2月9日、アンダソンは再びシカゴに向かい、広告会社に勤めるようになったが、かたわら、『サタデー・イブニング・ポスト』（Saturday Evening Post）誌のために短編小説を書くようになった。この頃から次第に、コーネリアアとの夫婦生活に亀裂が入り始めていたのだが、1915年に正式に離婚をした。翌1916年8月1日、彼はミシガン（Michigan）州出身の元女教師で、美術商に勤務していたテネシー・ミッチェル（Tennessee Mitchell）と再婚をしている。この時期アンダソンは、兄カールの紹介もあって、「シカゴ文芸復興」（Chicago Renaissance）と呼ばれる運動に属する芸術家達と知り合うようになった。

It was the time of the struggle for woman's suffrage, women parading, picketing the White House, going to jail. It was the time of the Little Theatre Movement, represented in Chicago by Maurice Browne. In writing there was what is now called "the Middle-Western movement." George Ade, the Chicago newspaper man, had attracted wide attention with his fables in slang. He had gone to New York, grown rich writing plays. Edgar Lee Masters, who had been a law partner of Clarence Darrow, was at work on his Spoon River Anthology. Carl Sandburg was at work on his Chicago poems. He was, I believe, a reporter on a socialist daily which afterwards failed, when he went on to the Chicago News. In the Chicago Tribune, Burt Leston Taylor was conducting his famous column and I believe Ring Lardner was writing baseball....

And how many remarkable men known, thoughtful friends made in those Chicago days. Henry Justin Smith, Ferdinand Schevill, Robert Morss Lovett, Burton Rascoe, Lloyd Lewis, Ben Hecht, Floyd Dell, Arthur Davidson Ficke, Harry Hansen, Carl Sandburg, Lewis Galantieri, Ernest Hemingway.

With these men and others I sat about in restaurants, talked of books, had the works of old writers brought to my attention, discussed new writers.

With Ben Hecht in particular I often went while he covered news stories. We quarreled and fought, made up, remained friends.

Other men not to become literary figures made lifelong friends. The big Irishman George Daugherty, one of the sweetest natures in any man I have ever known, and Marco Morrow, an ex-newspaper man and the closest thing to a genius I knew.... Then there was Roger Sergei, now at the head of the Dramatic Publishing Company. Talking with all these men of books and writers, drinking with them, sometimes spending most of the night walking and talking.

And there was the fascinating figure, Margaret Anderson. I knew her when she burst forth with her Little Review, wrote for her first number, wrote for the old Dial when it was published in Chicago. I became a part of what was for a time called "The Chicago School" of writers....

And there was that rather volcanic fellow, the Italian poet, Carnivali, who came from the East to help Harriet Monroe on Poetry: a Magazine of Verse. He sometimes raged about my rooms at night.

And Bodenheim, with his corn cob pipe and the broken arm he carried in a sling, although it was but an imagined break.

It was the time of a kind of renaissance in the arts, in literature, a Robin's Egg Renaissance I have called it in my mind since. It had perhaps a pale blue tinge. It fell out of the nest. It may be that we should all have stayed in Chicago. (4)

新文学運動の中心人物の一人であるフロイド・デル (Floyd Dell) — 彼はアイオワ (Iowa) 州のダベンポート (Davenport) の出身である。この運動の機関誌ともいふべき『リトル・レビュー』(Little Review, 1914-1929) の編集者のマーガレット・アンダソン (Margaret Anderson) — 彼女は、インディアナ州のコロンバス (Columbus) の出身である。ウィスコンシン (Wisconsin) 州ラシーヌ (Racine) 出身の新鋭作家ベン・ヘクト (Ben Hecht) — 彼は『シカゴ・ディリー・ニュース』(Chicago Daily News) 誌の記者であり、ユイスマン (Joris Karl Huysmans) とドストエフスキー (Feodor Dostoevski) の紹介に努めている。イリノイ (Illinois) 州ゲイルズベリー (Galesbury) 出身

の偉大な詩人カール・サンドバーグ (Carl Sandburg) 、そして、インディアナ州テレ・ホート (Terre Haute) 出身のシオドア・ドライサー (Theodore Dreiser) がいた。彼はこの時すでに、『シスター・キャリー』 (Sister Carrie) によって名声を得ていた。更には、カンザス (Kansas) 州ガーネット (Garnett) 生まれの弁護士エドガー・リー・マスターズ (Edgar Lee Masters) がいた。

これらの人達は、それぞれ違った個性を持つ人達ではあるが、共通な点は、彼らが皆小都市の出身者であり、今世紀とともに急激に広がった物質文明に愛想をつかし、自由を求め、そこから新しい芸術を創造しようという姿勢を持っていることである。このグループの中にテネシー・ミッチェルもいたのだが、彼女を通じてアンダソンは、ジョンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) のトリガント・バーロウ博士 (Dr. Trigant Barrow) を知り、フロイト (Sigmund Freud) の精神分析理論に接近するようになったのである。そして、このフロイトの学説が、作家としてのアンダソンに大きな影響を与え、しかも、その思想が、代表作『ワインズバーグ・オハイオ』に登場するいわゆる「グロテスクな人々」 ("grotesques")<sup>(5)</sup> への関心を生んだ原因の一つとして、無視することができないのは明らかだ。

フロイトの精神分析学と同様、アンダソンの文学に影響を与えたものとして、彼の読書経験を忘れてはいけなだろう。すでに述べたように家が貧しかったため、彼の受けた学校教育はほとんど貧弱なものであったが、読書の量は計り知れないものがある。彼が愛読し、影響を受けたと語っている作家は次のような者である。

However, I read greedily everything that came into my hands. Laura Jean Libbey, Walter Scott, Harriet Beecher Stowe, Henry Fielding, Shakespeare, Jules Verne, Balzac, the Bible, Stephen Crane, dime novels, Cooper, Stevenson, our own Mark Twain and Howells and, later, Whitman. (6)

コーネリア・レインと結婚して、フランス語を習ってからは、フランスの作家にも手を伸ばしている。アンダソンはこうした多くの作家達に触れることで、作家としての要素を徐々に、しかも着実に身につけてきたのだが、中でも最も強い影響を与えたのは、ゲートルード・スタイン (Gertrude Stein, 1874-1946) であった。

ここで、少しスタインについて説明をしよう。彼女は、ペンシルヴェニア (Pennsylvania) 州の裕福なジューウィッシュ・アメリカン (Jewish American) の家に生まれた。ラッドクリフ大学 (Radcliffe University) では、ヘンリー・ジェームズ (Henry James) の兄ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) に師事して心理学を学び、ジョンズ・ホプキンス大学では、脳組織を研究した。しかし、科学の研究に退屈を覚えると、1902年、当時の文学の中心地であったパリ (Paris) に移り<sup>(7)</sup>、そこに定住した。エズラ・パウンド (Ezra Pound) 、エリオット (T.S. Eliot) 、ジェームズ・ジョイス (James Joyce) 、画家ではホアン・グリス (Juan Gris) 、ピカソ (Pablo Picasso) 、マチス (Henri Matisse) 、セザンヌ (Paul Cezanne) 達と親しく付き合った。この彼女の

サロンに、アンダソンを初め、ヘミングウェイやドスパソス (John Dos Passos) が集まった。

スタインは、画壇を中心に起こった「立体派」(Cubism)の影響を受け、また、ベルグソン (Henri Bergson) やウィリアム・ジェームズの時間の概念を展開させた。彼女の文章理論は、対象を流動する現在として把握することであるが、その基調に使われていたのは、口語であり、制限された磨かれた用語の中に身近な感覚を確実に捉えることである。したがって、19世紀の散文が対象を描写するのに成功したのに対して、一方、スタインの散文は、小さな身振りや単語やことばの繰り返しのうちに、描かれる人物の息吹きが肌に感じられるほどの近さで描かれていると言えるであろう。

アンダソンがスタインの散文に触れたのは、1914年に『こわれやすいボタン』(Tender Buttons) が出版されて間もない時期である。兄のカールを通じてこの作品を知り、そのことばの美しさに引かれたのであった。

How significant words had become to me. At about this time an American woman living in Paris--Miss Gertrude Stein--had published a book called Tender Buttons and it had come into my hands. How it had excited me. Here was something purely experimental and dealing in words separated from sense--in the ordinary meaning of the word sense--an approach I was sure the poets must often be compelled to make. Was it an approach that would help me? I decided to try it. (8)

まず第一に彼が受け入れたのは、「オートマティック・ライティング」(automatic writing)の方法であり、彼は、創作とは感情の解放であると解釈した。つまり、作家なり詩人なりは、生を通して無意識のうちに様々な印象を内心に蓄積させ、短編を書くことで、内心に蓄積された印象を溢れ出させるということを意味していた。このことについて、ロジャー・アセリニュー (Roger Asselineau) は次のように言っている。

The author is not interested in painting the outside but in suggesting what is inside, "the infinitude within," as Henry Michaux calls it. (9)

第二は、単純なことばのコンビネーションの美しさ、あるいは用語についての鋭利な感覚に魅せられた。アンダソンはこのことについて、次のように述べている。

She is making new, strange and to my ears sweet combinations of words. As an American writer I admire her because she, in her person, represents something sweet and healthy in our American life, and because I have a kind of undying faith that what she is up to in her word kitchen in Paris is of more importance to writers of English than the work of many of our more easily understood and more widely accepted word artists. (10)



ここで私がアンダソンを素晴らしいと思ったことがある。それは、スタインの理論を嚙呑みにするのではなく、彼自身が育った中西部の口語を使って、「オーラル・ストーリー・テリング」(oral story telling)の方法を作り出している点である。両者の共通点は、キーワードの繰り返し、単語の繰り返し、また、単羅音の連続やゆるやかな口語の構文を用いることなどと言えよう。しかし、スタインの場合、高尚な教育から得たものであるのに対し、一方、アンダソンの場合は、自身の父親から受け継いだものだというところが、相違点と言えるかもしれない。

1919年に不朽の秀作『ワインズバーグ・オハイオ』を出版したのに続いて、アンダソンが1921年『貧乏白人』(Poor White)を発表した時、『ダイアル』(The Dial)誌でラヴェット(Robert Morss Lovett)が賞賛したのを初めとして、ワルドー・フランク(Waldo Frank)、ポール・ローゼンフェルド(Paul Rosenfeld)達が好意をもってアンダソンを迎え、彼の文壇における地位は定まったのであった。1921年初め、ローゼンフェルドがアンダソン夫妻を誘い、三人は5月にパリを訪れ、三ヶ月間滞在している。その間、彼はヨーロッパ文化に接する一方、ジェームズ・ジョイスやガートルード・スタインと出会い、鼎足した。そして、第一回「ダイアル賞」(Dial award)を受賞すると、1921年には『卵の勝利』、1923年には『馬と人間』(Horses and Men)という二つの優れた短編集を出版し、シカゴを代表する作家としての地位を手に入れた。しかし、この頃からテネシー・ミッチェルとの仲は悪化し、1924年1月に正式離婚し、同年ミシガン大学(Michigan University)出身の元女教師で、図書館学に造詣のあるエリザベス・プロール(Elizabeth Prall)と再婚している。

彼はこの時期に、ロレンス(David Herbert Lawrence)の影響を強く受け、ジョイスを初め、前衛文学の手法を駆使して、1923年には『多くの結婚』(Many Marriages)、1925年には『暗い笑い』(Dark Laughter)という二つの長編小説を発表した。この二作品とも、良しにつけ悪しきにつけ、彼の作家的野心を表しているものとして注目され、殊に『暗い笑い』は、ベスト・セラーの首位を占める売れ行きを見せた。しかし、作家としての限界を示すもので、新しい時代の方向を消化しきれない弱さがあったのである。

そうこうしているうちに、アメリカは、1929年10月を境いに不況期に入った。失業者は町に溢れ、工場では労資の対立がますます激化していった。そうした状況の中で、作家とはどうあるべきか、作家はもっと現実に目を向けなければならないのだということをアンダソンは考え、搾取される労働者に共感を持った。そうして、1930年、ヴァージニア(Virginia)州マリオン(Marion)生まれの進歩的で、インテリな労働問題の専門家であるエリナー・コペンハイヴァー(Eleanor Copenhavor)と出会ったのである。エリナーに公私ともに触発されたアンダソンは、1932年に、『欲望のかなた』(Beyond Desire)のようなストライキ小説を発表すると同時に、エリザベス・プロールと正式に離婚している。そして翌1933年7月、エリナーと再婚し、四度目の結婚を成し遂げている。

この時期のアメリカは、資本家と労働者の対立が顕著であり、文学においても社会意識

が高まり、マルキシズム (Marxism) が導入されて、アメリカ社会を階級闘争の層において捉えることこそ、文学者の使命であると言われた。アメリカ作家の大半は左傾し、入党する者が相次いだ。例えば、スタインバック (John Steinbeck) やドスパススなどがある。アンダソンも左傾したが、いわゆる左翼作家とは違い、理論的ではなく感情的に左傾していた。そのため、ヒックス (Granville Hicks) やカルヴァートン (V. F. Calverton) といった左翼批評家達から手厳しい非難を受けたのである。例えば、ヒックスは次のように批判している。

Since he made this discovery Anderson has written one book, Beyond Desire. It has most of the virtues of his earlier work, and most of the faults. It shows that his approach to communism is almost purely personal; it attracts him because it seems to answer some of the questions that have long troubled him. The economic and philosophical implications of communism mean little to him, and certainly he is not yet filled with the spirit of the fighting vanguard of the proletariat. Therefore he is still a long way from over-coming the effects of years of bewilderment and frustration, and Beyond Desire is as lacking in unity and as chaotic in its analyses as any of its predecessors. But the book is significant because a change in Anderson may signify a change in the American people, to whom he has always been extremely close. And when one compares the characterization of Red and the description of the mill girls with the work Anderson did in Many Marriages and Dark Laughter, there is reason to believe that he may have found a basis for further development. (11)

こうした時代を意識した作品の一方において、アンダソンは、1924年発表の『物語作者の物語』、1926年発表の『ター——中西部の子供』(Tar: A Midwest Childhood)、1933年発表の『森の中での死』などによって、自分が生まれ育った小さな町の生活を書き続けていった。いずれも、近代化の波に押し流されて消えて行く世界について、限り無い愛着を込めて書いたものである。1939年から1940年にかけて、彼は『回想録』(Sherwood Anderson's Memoirs)の整理、執筆にかかった。翌1941年3月8日、国務省派遣の非公式親善使節としてパナマ(Panama)へ行く途中、前夜のパーティーでうっかり呑み込んだ瓜蒌枝が腸に穴を開けて、腹膜炎を誘発し、コロム(Colon)で64歳の生涯を閉じたのであった。『回想録』はポール・ローゼンフェルドなどの努力により、1942年3月、アンダソンの死後出版されたが、こうした自伝や素晴らしい短編の数々は、永遠に消えることのないものとして、賞賛されている。(12)

## 第2章 クライドという町

シャーウッド・アンダソンは、20歳までに三つの町の生活を体験している。彼が生まれたカムデン、その後短期間住んだカレドニア(Caledonia)、8歳から住み始めたクライドの三つで、いずれもオハイオ州に属する小さな田舎町である。三番目に住んだクライドは、彼の最も多感な少年期から青年期にかけての時期を含んでおり、『ワインズバー

グ・オハイオ』の舞台となっていることは周知のとおりである。

クライドという小さな町について考える前に、アンダソンの物心がつき始めた1880年頃から作家となる1910年頃までのアメリカの変動について少し述べてみたい。『アメリカ人民の歴史』(We, the People) やその他の歴史書を参考に分析した場合、私は、この約30年間を九つの路線に分けることができると思う。その第一は、工業力の発達ということである。1880年 1月28日、エジソン(Thomas Alva Edison) が白熱灯の発明に対する特許を得た。これをきっかけに、アメリカの工業力が発達してくるのだ。翌1881年 2月10日には、ワシントン(Booker Taliaferro Washington) が、アラバマ(Alabama) 州のタスキーギ(Tuskegee) に、工業技術院(Tuskegee Normal and Industrial Institute) を設立し、その発達は更に勢いが増した。

第二は慈善団体の登場とその運動である。1880年 3月24日に救世軍のアメリカ支部、翌1881年 5月21日には赤十字のアメリカ支部が成立した。それ以降、様々な慈善団体が登場したが、その例としてはボーイスカウト団(The Boy Scouts) やロータリークラブ(Rotary Club) などを挙げることができるだろう。

第三は政治的路線である。1880年11月 2日に共和党が圧勝を収めると、翌1881年 3月 4日には、米国第20代目の大統領としてガーフィールド(James Abram Garfield) が就任した。しかし、政治には暗殺が付き物の世であるため、7月 2日には狙撃されてしまった。この頃は、共和党が主流であったのだが、1884年11月 4日には民主党が共和党に圧勝し、第22代の大統領としてクリーヴランド(Stephen Grover Cleveland) が台頭した。この大統領の登場ということで、アメリカの社会が大きく変わったことがわかるだろう。

第四は文化活動である。1881年11月 8日、フランスの女優サラ・ベルナール(Sarah Bernhardt) がニューヨーク(New York) に登場し、次第にアメリカの文化活動が盛んとなってきた。この頃からオーケストラも流行し、1883年にはメトロポリタン歌劇場(Metropolitan Opera House) が設立されている。

第五は労働問題。この問題は1930年代まで盛んであったが、1881年 8月 2日に、ガンパーズ(Samuel Gompers) が米国労働総同盟(AFL) を創立したのが発端だ。そして、1886年 5月 1日には、労働者が八時間労働を主張して四日間にわたって警察と対立するという暴動が起こった。

第六は、いかにもアメリカらしい事件であると言えるかもしれないが、ある種の英雄の没落ということである。アメリカの強盗団の首領であったジェシー・ジェイムズ(Jesse Woodson James) が、部下の裏切りにより殺されるという事件が1882年 4月 2日に起こった。彼は、列車と銀行とを専門に強盗していたのだが、義賊と呼ばれ、「アメリカのロビン・フッド(Robin Hood)」とまで言われていたそうだ。

第七番目もアメリカならではの話題だ。それは移民制限ということなのだが、中国人に十年間は市民権を与えないという中国人排斥の法が、1882年 5月 6日に制定された。この法律が制定されたその頃から、犯罪者や精神異常者などのアメリカへの入国が制限さ

れ始めてきたのであった。

第八は、何といっても鉄道の開発である。1870年頃から発達し始めた鉄道は、1883年前後にほぼアメリカ大陸を横断するに至った。この鉄道の大横断達成により、シカゴより以西で収穫された生産物を鉄道によってシカゴに集め、更に、ニューヨークやボストン（Boston）という消費地へ輸送することが可能となったのである。その結果、鉄道の要所要所に都市が発達するようになり、いわゆる新興都市が誕生することとなった。したがって、アメリカの都市が、鉄道の発達によって生まれたと言っても過言ではないだろう。アメリカという国で、鉄道が登場すれば忘れてはいけないのは、自動車と飛行機であろう。自動車は、1908年頃から実用化し、同年10月11日には、フォード（Ford）車モデルTが850ドルで発売されている。また、飛行機に関しては、ライト（Wright）兄弟が1903年12月、飛行機による初めての空中飛行に成功したことは世界的に有名な事実であるが、1910年頃から実用化されてきている。こうした鉄道や自動車や飛行機は、互いに対立しながら発達したのであった。

最後の第九路線は、資本家の誕生である。主要な三人をあげるとするならば——ロックフェラー（John Davidson Rockefeller）、モーガン（John Pierpont Morgan）、カーネギー（Andrew Carnegie）——である。ロックフェラーは、スタンダード石油会社（Standard Oil Company）を創立し、アメリカの石油を一手に握った。モーガンは、銀行家から進出してアメリカの鉄道を支配し、モーガン財團（J.P. Morgan and Company）を築き上げた。またカーネギーは、1910年に主要工業十社を買収し、鋼鐵会社を設立したのである。

以上のように、鉄道と大都市の交流、資本家の台頭、その資本家に対立する労働者の悲惨な状況というのが、この約30年間の大きな特徴だと言えるであろうが、こうした工業化への目覚ましい進歩の中で、小さな町クライドは、どのような変化を見せたのだろうか。

アンダソンが初めてやって来た当時のクライドは、人口3,000から4,000の町であり、数年のうちに新しい家や工場の建設が目立ち、鉄道も一級のものを通り、健康に成長を遂げた町の典型であったということだ。<sup>(13)</sup>また、1885年から1887年にかけて、近くに天然ガスが発見され、投機が盛んに行われたが、1887年5月に大火に会い、全ての施設を焼失してしまった。このガス工場の他に、当時クライドにあった工場は次のようなものである。クライド刃物会社（The Clyde Cutlery Company）、ヒューズ石材（The Hughes Granite Company）、クライド・オルガン製造会社（The Clyde Organ Manufacturing Company）、クライド漬物会社（The Clyde Kraut Company）、ミフォード青果会社（The Heford Fruit Company）、それと、樽を作る会社や自転車工場もあった。こうした時代の変遷とともに、クライドのような小さな町はどんどん大都市に人口が吸収されてしまい、クライドの主産物であった苺やキャベツも商業化し、自分達のために作るものから、都会の食卓のために作るものへと変わっていったのであった。このように、寂れていく町の側の立場に立って、アンダソンは『ワインズバーグ・オハイオ』を書いたと言えるだろう。

この作品の中の一エピソード「冒険」(“Adventure”)では、ある雨の降る夜に、裸のまま通りに駆け出していくアリス・ハインドマン(Alice Hindman)の孤独な生活が描かれている。都会へ行ってしまった少女時代の恋人ネッド・カリー(Ned Currie)が、帰らないと分かっているながらも、彼の帰郷を信じることでその孤独に耐えようとしているのだ。このエピソードの背後には、「旧時代から新時代へと社会が転換したことが伺われる。旧式の農業は機械化のために減り、青年達は一攫千金を夢見て都会へと去っていくし、新時代に順応できない人達はより悲惨な生活に負いやられなければならない」<sup>(14)</sup>のだ。こうした宿命とも言うべきものを、アリスとネッドは背負わされている。

しかし、アンダソンは、このような社会の変化に付いて行けないことを、ただ嘆いているだけではないようだ。むしろ、今よりもずっと昔の方がいいのだ、あるいは、都会よりも田舎の方がいいのだ、更に、その良さを知っている人はほんの少数で、そういう人達こそ真の意味で生きた人間であると言えるのだ、と主張しているようである。

In the fall one walks in the orchards and the ground is hard with frost underfoot. The apples have been taken from the trees by the pickers. They have been put in barrels and shipped to the cities where they will be eaten in apartments that are filled with books, magazines, furniture, and people. On the trees are only a few gnarled apples that the pickers have rejected. They look like the knuckles of Doctor Reefy's hands. One nibbles at them and they are delicious. Into a little round place at the side of the apple has been gathered all of its sweetness. One runs from tree to tree over the frosted ground picking the gnarled, twisted apples and filling his pockets with them. Only the few know the sweetness of the twisted apples.

(15)

かつてアメリカにあった黄金時代が、時とともに腐敗し崩壊していった。それとちょうど同じように、ひねこびた林檎も次第に忘れられ、本当に真実を描えた人も文明の興隆とともに少なくなり、やがては消えていってしまうのだろう、というアンダソンの切実な思いが伝わって来るように思われる。

このように、今よりも昔が良かったと唱えることは、いつの世にもあるようにも思われる。なぜなら、多少時代はずれるものの、ブローティガン(Richard Brautigan)も『アメリカの鱒釣り』(Trout Fishing in America, 1967)の中で、古き良き時代への讃歌を贈っているからだ。こうした思いを抱きながら、真の人間とは何か、人間らしい生き方とは何かと考えた時、当然そこには、性ということが表れてくる。現代のアメリカ—アメリカに限らないかもしれないが—ほど、性が解放的な国もないだろう。しかし、アンダソンが『ワインズバーグ・オハイオ』を発表した当時は、まだまだ、アメリカは性に対して極めて閉鎖的だった。なぜなら、ピューリタンの影響がまだ色濃く残っていたからだ。もちろん、アンダソンに重要な小説を書くつもりは毛頭なかったのだが、生き生きとした人間を描くために、必然的に性を取り上げたのである。けれども、その描写はいたって控え目である。例えば、「手」ではウィング・ビドルボウム(Wing Biddlebaum)の言動を通して同性愛を描き、「紙玉」では抜歯の場を描くことで、墮胎手術を暗示している。至

る所に性は書き込まれているのだ。控え目な表現であるがために、かえって、神秘的な調子を帯びているように私には思われる。

以上のように、新しい文明の波に押し潰されて生きて行かなければならない人々が、性的欲求や行為、あるいは他人への好奇心というものを抱いて、息詰まったものを吐き出す。すると、その人々はたちまちグロテスクな存在となり、真の自己を発見し、表現することができるのではないだろうか。小さな町クライド、あるいはワインズバーグ (Winesburg) においてだからこそ、それが可能となるように思われてならないのである。

### 第3章 シャーウッド・アンダソンの女性観

#### §1 「森の中の死」を中心に

19世紀後半から今世紀初頭にかけて、商工業が発達し、その中心地となった都会に人口が集中し、その結果、農村が寂れていったことはすでに述べた。こうした時代の変化を念頭に置いてみると、都会における生存競争の厳しさ、あるいは没落の道を辿る農村を題材とした作品が登場したのは、当然だと言えるだろう。この題材の焦点を女性に合わせた場合、私は、当時の作家達が、どのように女性というものを描いていたのだろうという疑問を抱かずにはいられない。

まず第一に、その代表的作家として、シオドア・ドライサーを挙げるができるだろう。彼の描く女性の特徴は、代表作『シスター・キャリー』(1900)や、『アメリカの悲劇』(An American Tragedy, 1925)の中で顕著に表されていると思う。いずれも、仕事を求めて田舎町から都会を訪れ、新興階級の華やかさに目を奪われていく女性が登場する。ただし、『シスター・キャリー』においては、新しい時代の波に乗って、思いもかけない成功を手に入れていく女性を描いているのに対し、『アメリカの悲劇』では、成功の夢を追いながら、結局、当時のアメリカ社会の倫理基準に押し込められて、悲劇を招くしかなかった女性を描いているところが、対照的である。つまり、ドライサーは、南北戦争が終わって農業国から商工業国へと変わったアメリカの中に、金持ちと貧乏人との格差やその距離を見出し、金銭というものを一つの価値判断基準として、下層階級から上層階級へと這い上がろうとする意気込みや活力を描いたと言えるだろう。

第二は、このドライサーとは対照的な女性を描いたシャーウッド・アンダソンである。彼の生い立ちについてはすでに述べたが、彼の女性観を考える上で、決して忘れることができないのが、母エマ・スミス・アンダソンである。幼くしてこの母を失ったことが、彼の人生——作家としての人生だけでなく、一人のアメリカ人としての人生——に大きな衝撃を与えていたようである。

それでは、この母とはどのような人であったのだろうか。アンダソンは、自伝的作品『物語作者の物語』の中で次のように述べている。

Mother was tall and slender and had once been beautiful. She had been a bound girl in a farmer's family when she married father, the improvident young dandy. There was Italian blood in her veins and her origin was something of a mystery. Perhaps we never cared to solve it--wanted it to remain a mystery. (16)

アンダソンは、この"bound girl"<sup>(17)</sup>であった母を見事に作品の中に映し出しているのだが、それは、「森の中の死」("Death in the Woods")においてである。中心人物である老婆に、彼自身の母のイメージが投影されているのだ。このことについて、アーヴィング・ハウ (Irving Howe) は次のように述べている。

... Anderson could hardly have failed to notice that the story may be read as an oblique rendering of what he believed to be the central facts about his mother's life: a silent drudgery in the service of men, an obliteration of self to feed their "persistent animal hunger," and then death. (18)

「森の中の死」の老婆は、時代から、社会から、そしてその人間から、なぜかしら見捨てられている孤独な人間である。その老婆の孤独は、全く完全なものとして描かれている。

... she was a bound girl and did not know where her father and mother were. Maybe she did not have any father. You know what I mean. (19)

もちろん、老婆には町にも話し相手は一人もいない。"She knew no one. No one ever talked to her in town."<sup>(20)</sup>この老婆と他の人間との間には、愛も好意もない。いや、もはやちょっとした情緒さえ介在していないように思われる。

しかし、この老婆は、アメリカの文明や社会機構の中で隔絶され、孤独な煩悶や絶望のあまり、"the beating of the wings of an imprisoned bird"<sup>(21)</sup>を繰り返したりはしていないのだ。むしろ、外の世界には一種の無関心をもって対応している。

She didn't mind much; she was used to it. Whatever happened she never said anything. That was her way of getting along. She had managed that way when she was a young girl at the German's and ever since she had married Jake. (22)

老婆は、自分が引き裂かれた人間であることを、自分の宿命として認識しているように私には思われてならない。つまり、他の人間と結ばれない人間であることを自認しているのだ。それゆえに、彼女には、もはや人間関係への関心はない。人間関係に無関心な者に、煩悶や絶望はあり得ないのではないだろうか。この状態は、孤独の極限に近いと言えるだろう。一步間違えば、狂人か白痴的無感覚者にもなりかねない状態だ。

けれども、生きている姿からは救いの一筋の光も見出すことができない老婆に、何と悲劇的な女性だろうと、素直に、あるいは簡単に同情して良いものなのだろうか。俗に言う「悲劇のヒロイン」と言えば、フローバール (Gustave Flaubert) の『ボヴァリー夫人』

(Madame Bovary, 1857) のボヴァリー夫人、モーパッサン (Guy de Maupassant) の『女の一生』 (Une Vie, 1883) のジャンヌ (Jeanne)、イブセン (Henrick Ibsen) の『人形の家』 (A Doll's House, 1879) のノラ (Nora) を思い浮かべる人が多いだろう。彼女達はひどく頭が良く、感情が豊かで、自分の置かれている現状に対しての不満や反発を強く持っている。アンダソンの老婆とは正反対である。これが悲劇的ではない理由なのか、いや、別にあるはずだ。それは、彼女に課せられたある種の役割ともいうべきものだ。そして彼女は、この役割のおかげで、狂気にも白癡的感覚にも陥らずに済んでいるように思われる。

The woman who died was one destined to feed animal life. Anyway, that is all she ever did. She was feeding animal life before she was born, as a child, as a young woman working on the farm of the German, after she married, when she grew old and when she died. She fed animal life in cows, in chickens, in pigs, in houses, in dogs, in men. (23)

彼女の役割とは、生命を養うことであり、宿命的に与えられた人生でのこの役割を、生命をかけて演じたのだ。老婆は、自らの人生での役割に殉死したのかもしれない。死の段階に到達して初めて、救いの光を彼女の中に見出すことができたのである。

それにしても、何と孤独で虐げられた女性なのだろう。この老婆は、前述のとおり、アンダソンの母親のイメージが投影されているのだが、どうやら実の母エマは、老婆のようにただ黙々と働いていただけではないようだ。少なくとも、子供達には母の優しさや愛情を示し、子供達の方も母への愛を示している。

The mother puts the kerosene lamp on a little table by the bed and beside it the dish of warm comforting melted fat. One by one six hands are thrust out to her.

There is a caress in her long toil-hardened fingers.

In the night and in the dim light of the lamp her dark eyes are like luminous pools.

The fat, in the little cracked china dish, is warm and soothing to burning itching hands. For an hour she has had the dish sitting at the back of the kitchen stove in the little frame house far out at the edge of the town.

The strange silent mother! She is making love to her sons but there are no words for her love. There are no kisses, no caresses.

The rubbing of the warm fat into the cracked hands of her sons is a caress. The light that now shines in her eyes is a caress. (24)

無言のうちに執り行われる一種の儀式めいたこの行為は、ただ愛情を込めて子供達の手に油を塗るだけでなく、宗教的な儀式を見るような厳肅さと神秘性がある。町はずれの粗末な木造家屋といい、静寂といい、情景を照らし出しているランプの明りといい、それは宗教画の一場面を見ているような美しさに溢れている。アンダソンはたぶん、母親の中に聖母の姿を認めていたに違いない。(25)



では、なぜアンダソンは、このような母のエピソードを書いたのだろうか。“bound girl”<sup>(26)</sup>であり、夫に虐げられていながらも、ただ黙って働き、家を守ることしかなかったエマは、自分の子供達に、「私はあなたのお母さんよ、あなたは私の子なのよ」と無言のまま、心の中で激しく叫ぶことで、生きて行く希望と勇気を自分自身の中に見出そうとしていると思われる。そして、子供達の手を油を塗ってやるという行為は、その希望と勇気の一つ一つ確かめるための手段であるのだろう。また、その行為は、母エマの痛切な思いが姿を変えて現れたものなのかもしれない。この儀式めいた行為を行うことで、妻としてよりも母としての自分を、エマはしっかりと自覚することができるのだ。その自覚の喜びと責任とが、彼女の目の輝きとして表れる。なんと眩しい光！まるで後光のようだ。

こうして、生氣を取り戻し、燃え輝いている母のその姿の中に、アンダソンは、女性的な優しさのみならず、その裏に隠された母性的な強さを発見したのに違いない。通俗的な表現を使えば、さながら、「女は弱し、されど母は強し」というところだろう。

## § 2 『ワインズバーグ・オハイオ』の女性達

シャーウッド・アンダソンの代表作『ワインズバーグ・オハイオ』には、実に多くの人間が登場している。そして、皆がワインズバーグという田舎町に結び付けられ、ワインズバーグを形作っているのだ。アンダソンの扱っている男性達が、“It was the truths that made the people grotesques.”<sup>(27)</sup> というように、グロテスクであることは、周知のとおりである。一方がグロテスクであれば、もう一方がグロテスクでないはずはない。

アンダソンは、『ワインズバーグ・オハイオ』においても、自分自身の母親のイメージをそこに登場する女性達に投影しているようだ。その女性達は、「森の中での死」の老婆と同じように虐げられ、忍従の淵に深く沈み込んでいるのだろうか。確かにそういう一面も持っているが、それだけではなさそうだ。アンダソン自身の母も、虐げられているだけでなく、別の一面も持っていたのは確かと言えよう。実際、アーヴィング・ハウが、アンダソンが扱っているほど、彼の母は悲惨であったのだろうかかと疑問を投げかけている。

Sherwood was also to weave wistful fantasies into his memories of his mother; in his Memories he has written that she was a “bound girl” from the age of nine. But the visions of adolescent serfdom suggested by this phrase are quite unwarranted, for Emma had not been “bound” and had actually been well cared for by the family with whom she lived as half-ward and half-servant. A diary kept by Emma as a girl shows an affectionate and intimate relationship between the “bound girl” and her “masters.” (28)

いずれにせよ、アンダソンの描く女性達は特典であり、敢えて言うならば、日本の封建時代に生きた女性達と似ていると言えるように思われる。そこで、可能な限り作品から抽出して、彼女達にスポットを当てて分析してみたいと思う。

『ワインズバーグ・オハイオ』に登場する女性達は、二つのグループに分類することができると思う。一つは、すでに述べてきたような虐げられる女性のグループであり、もう

一つは、進歩的で新しい女性のグループである。彼女達の中には、前者だけに属する者もいれば、後者だけに属する者もいる。また、両者に属する者もいるように思われる。順を追って説明してみることにしよう。

まず第一に登場する女性は、「グロテスクなものについての書」("The Book of the Grotesque")の"one, a woman all drawn out of shape" (29)である。彼女は、老作家の"a dream that was not a dream" (30)の中に現れたのだが、明らかに、外面的に、アンダソンの言うところのグロテスクな存在だ。グロテスクであるということは、同時に、虚けられる女性のグループに入ることになるのは確実だろう。しかし、アンダソンのグロテスクとは、このように単なる肉体的な面だけではなく、当然、精神的な面をも備えている。その精神的にグロテスクな面を持っている女性は、この後たくさん登場して来るが、その第一号は、「紙玉」のリーフィ医師 (Doctor Reefy) の妻であると思う。彼女の場合は、リーフィ医師と知り会うことで、グロテスクな存在になることができたのだ。それでは、彼女は、虚けられる女性のグループに属するのか。いや、進歩的な女性のグループに属するのかもしれない。両方に属しているように思われる。正確に言うならば、彼女が、求婚者に毎日追い回される運命にあったということは、一種の虚けられている状態であろう。逆に、結婚相手を自分自身の意志で決定し、自らの判断を下して墮胎手術を受けたということは、新しい女性としての生き方と言えるのではないだろうか。

このような両面を持った他の登場人物で、忘れてはいけない者が、「母親」に出て来るエリザベス・ウィラード (Elizabeth Willard) である。「森の中での死」の老婆が、アンダソンの実の母親エマ・スミス・アンダソンと同一視されているのと同じように、エリザベス・ウィラードも、エマをモデルに創造した人物だと考えられる。それは、次のような描写 — 外見上にすぎないが — がその証拠となるだろう。

Mother was tall and slender and had once been beautiful. (31)

... the shoulders were so narrow and the body so slight that in death it looked like the body of some charming young girl. (32) [下線筆者]

She was a beautiful young girl. (33)

Elizabeth Willard, the mother of George Willard, was tall and gaunt.... (34)

... the tall dark girl had been in those days much confused. (35) [下線筆者]

更には、リーフィ医師の妻についても、次のように書かれている。

The girl was quiet, tall, and dark, and to many people she seemed very beautiful. (36) [下線筆者]

いずれにしても、背が高く、ほっそりとしていて、ブルーネット型の美人であったようである。

エリザベス・ウィラードは、『ワインズバーグ・オハイオ』の中の二つのエピソード、「母親」と「死」(“Death”)に登場している。この二つのエピソードを通じて、彼女といるものを分析してみることにしよう。

彼女は、現在は慮げられた女性だ。しかし、こういう状態になる以前の彼女は、なかなか進歩的で活気的であり、当時としては珍しい存在であった。

In her girlhood and before her marriage with Tom Willard, Elizabeth had borne a somewhat shaky reputation in Winesburg. For years she had been what is called “stage-struck” and had paraded through the streets with traveling men guests at her father’s hotel, wearing loud clothes and urging them to tell her of life in the cities out of which they had come. Once she startled the town by putting on men’s clothes and riding a bicycle down Main Street. (37)

このような行動力に満ち溢れ、積極的に感情豊かな少女を、なぜアンダソンは、心身ともに衰弱した女性に変えたのだろうか。当然のことながら、毎日の家事や労働に追われているために衰えたのは確かではあるが、そうであるならば、何も若い頃の夢まで、打ち捨て去られる必要はないはずだ。だが、敢えてアンダソンが、彼女からそうした夢を奪い、“Although she was but forty-five, some obscure disease had taken the fire out of her figure.” (38) というように、生気のない人間にしてしまったのは、輝ける夢も希望も、押し潰されてしまうような当時の社会の慣習や、倫理的・道徳的思想の固執しさやくだらなさを非難すると同時に、そうした社会の規則に従わなければならない人間の無力さを、訴えるためだったのではないかと私は思う。

けれども、それだけにとどまっていないのが、アンダソンの優しさだ。その優しさは、エリザベス・ウィラードが息子のジョージ・ウィラード (George Willard) について思い悩むことに映し出されている。なぜなら、この時ほど、生き生きとして、大胆で、活気に満ちた女性として描かれているエリザベス・ウィラードはいないからだ。若い頃、自分が実現、達成できなかったことを、自分自身の子供に託すというパターンはよく見かける。ロレンスの『息子と恋人』(Sons and Lovers) もその例と言えるだろう。両作品とも、単なる母親と子供の関係というよりは、その絆が非常に強いがために、親子関係を超越したものが背後のテーマとして流れている。殊にエリザベス・ウィラードの場合は、結婚以来持ち続けた欲求不満、フラストレーションがあまりに積み積もっているため、息子のことを、異常なほどに気に病んでいる。つまり、親子関係の裏に潜んだ「エーディプス・コンプレックス」(Oedipus complex) と呼ばれるものの逆の形<sup>(39)</sup>が、息子のことを思うたびに顔を出しているのだ。

ここで、エーディプス・コンプレックスを扱うのが得意であったオニール (Eugene Gladstone O’Neill, 1888-1953) を私は思い出した。彼の代表作である『楡の木陰の欲望』

(Desire Under the Elms, 1924) を例に取ってみよう。オニールは、この作品において、露骨な愛欲と物欲に絡む激しい憎悪と闘争を描き、むき出しな人間性を露らせている。そして、ここに描かれている世界は、外面的には、醜悪な人間本能に根ざした不倫の極限を示しているが、内面的には、全ての道徳的因襲を脱したニュー・イングランド (New England) 農民の血みどろな感情生活であり、その原始的生命力の横溢感、非常に感動的である。しかもオニールは、醜い欲望に支配されながらも、それぞれに夢を抱いている登場人物の赤裸々な生活を、巧みに表現している。欲望と夢、これは、エリザベス・ウィラードにも共通しているものだ。

しかし、『楡の木陰の欲望』と『母親』とが、全く異なる作品となる点の一つ存在することに気が付く。オニールは、蔭幕で、エベン・キャボット (Eben Cabot) とアビー・バトナム (Abbie Putnam) の二人が、醜い物欲と愛欲の葛藤とそれに伴う罪業 — いわゆる近親相姦と嬰兒殺し — を経験した後、全てを超越して、何か心温まるほのぼのとした真実の愛に目覚めるようにしている。つまり、アビー・バトナムに罪を犯させることで、限りない人生の幸福と美とを見出し、与えてやっているのだ。一方、『母親』の場合はどうかと言うと、アンダソンは、エリザベス・ウィラードに次のような考えを抱かせ、発言させている。

"Now," she told herself, "I will act. There is something threatening my boy and I will ward it off." The fact that the conversation between Tom Willard and his son had been rather quiet and natural, as though an understanding existed between them, maddened her. Although for years she had hated her husband, her hatred had always before been a quite impersonal thing. He had been merely a part of something else that she hated. Now, and by the few words at the door, he had become the thing personified. In the darkness of her own room she clenched her fists and glared about. Going to a cloth bag that hung on a nail by the wall she took out a long pair of sewing scissors and held them in her hand like a dagger. "I will stab him," she said aloud. "He has chosen to be the voice of evil and I will kill him. When I have killed him something will snap within myself and I will die also. It will be a release for all of us." (40)

自分と息子との間を邪魔し、引き裂こうとする者は皆許せないという思いが、ついに、フラストレーションとしての絶頂に達したようである。だが、結局エリザベス・ウィラードは、アビー・バトナムとは違って、殺人という大罪を犯すことはできなかった。そして、またもや、自分の夢を果たすことができなかったという苦しみに捕われてしまう。いや、かえって夫を殺さずに済んで良かったのかもしれない。もし夫を殺していたなら、息子のジョージ・ウィラードは、自分の口から自分の意見を伝えることはしなかったかもしれないし、そうならば、たった一人の救い主の息子をも失い、エリザベス・ウィラードの挫折は、ますます痛々しいものになっていたに違いない。

ところが、アンダソンは、こうした挫折を味わったエリザベス・ウィラードに、もう一度だけチャンスを与えている。それは、「死」においてである。サーストーン (Jarvis A. Thurston) は、「死」について次のように述べている。

"Death," broken into four sections, begins with Dr. Reefy, turns to his relationship with Elizabeth Willard (which involves much retrospective material about her early life and her marriage with Tom Willard), shifts to George's reactions upon the death of his mother, and ends on a footnote about the \$800 that Elizabeth had hidden away. (41)

これは、単なる外面的説明にすぎない。では、この作品の内面とは何だろう。私は、リーフィ医師も、エリザベス・ウィラードも、ロマンティストであり、実現することのできない夢に満ちているように思う。また、人生という不透明な夢のために、そこにある物事を鋭く否定することを越えて発展することが、できないでいるようにも思う。いずれにせよ、アンダソンは、互いに良く似通ったリーフィ医師とエリザベス・ウィラードとを遠く離れさせることで、二人に、殊にエリザベス・ウィラードに再び希望を与えているのだ。たとえ二人の関係が、現実逃避であったとしても、真実の愛こそが、フラストレーションや絶望や挫折を救えるというアンダソンの心優しい考えが、ここに表れているように思われる。希望に満ち溢れ、生き生きとしたエリザベス・ウィラードを、アンダソンは、リーフィ医師の目を通して、次のように述べている。

The woman's voice began to quiver with excitement. To Doctor Reefy, who without realizing what was happening had begun to love her, there came an odd illusion. He thought that as she talked the woman's body was changing, that she was becoming younger, straighter, stronger. When he could not shake off the illusion his mind gave it a professional twist. "It is good for both her body and her mind, this talking," he muttered. (42)

Elizabeth sprang out of the chair and began to walk about in the office. She walked as Doctor Reefy thought he had never seen anyone walk before. To her whole body there was a swing, a rhythm that intoxicated him. When she came and knelt on the floor beside his chair he took her into his arms and began to kiss her passionately. "I cried all the way home," she said, as she tried to continue the story of her wild ride, but he did not listen. "You dear! You lovely dear! Oh you lovely dear!" he muttered and thought he held in his arms not the tired-out woman of forty-one but a lovely and innocent girl who had been able by some miracle to project herself out of the husk of the body of the tired-out woman. (43)

私は、「森の中での死」の老婆も、若く美しく愛らしい少女のような姿になったことを思い出す。それは、死という事柄によって成し得たことだった。同じように、アンダソンは、同性質のリーフィ医師と会うことで生気を与えられたエリザベス・ウィラードを、そのままの状態に保つために、ここでも死への道を彼女に歩ませている。そして、彼女は死ぬことによって、全てから解放されたのである。同時に、作者は、息子のジョージ・ウィラードも解放し、後に続く「出発」("Departure")において、大人への新たな旅立を描いている。こうした解放があるからこそ、『ワインズバーグ・オハイオ』は素晴らしい作品だと言われるのだろう。

... Winesburg, Ohio is far from the pessimistic or destructive or morbidly sexual work it was once attacked for being. Instead it is a work of love, an attempt to break down the walls that divide one person from another, and also, in its own fashion, a celebration of small-town life in the lost days of good will and innocence. (44)

「母親」の次のエピソード「哲学者」("The Philosopher")でも、アンダソン自身の母の面影を見ることができる。ここに描かれているパーシヴァル医師(Doctor Parcival)の家族は、「母親」の場合と同じような、破壊され打ちのめされた家族である。そして、パーシヴァル医師の母親は、アンダソンの母親と生活ぶりが似ているように思われる。作者アンダソンは、次のように描いている。

My mother was poor. She took in washing. (45)

My mother, who was small and had red, sad-looking eyes, would come into the house from a little shed at the back. That's where she spent her time over the washtub scrubbing people's dirty clothes. In she would come and stand by the table, rubbing her eyes with her apron that was covered with soap-suds. (46)

どうやら、虐げられた女性を畫こうとすると必ず、アンダソンは、母のことを思い出していたように考えられる。

以上のような母親像とは別に、『ワインズバーグ・オハイオ』の中では、他人の女性——特に恋人——に対する作者の思想も伺うことができる。「誰にもわかりはしない」("Nobody Knows")、「或る自覚」("An Awakening")、そして「世間知」("Sophistication")の三作品は、同様のモチーフを基盤としながらも、ジョージ・ウィラードのそれぞれ三人の異なる女性の扱い方を描き、しかもこの三作品が、順を追って彼の成長ぶりを示しているところは、非常に興味深い。更に、いずれの女性も、進歩的で新しい女性のグループに属しているのだ。

「誰にもわかりはしない」では、ジョージ・ウィラードの初めての性体験が描かれているのだが、作者は、その相手の女性ルイーーズ・トラニアン(Louise Trunnion)の方からモーションをかせさせている。しかも、それは単純極まる手紙によるもので、単純なだけに、その内容の率直さがかなり強い。"The letter was brief. 'I'm yours if you want me,' it said."<sup>(47)</sup> そもそも女の方からことを起こすこと自体、大胆だと言えるのだが、この作品の背景となっている社会を考えたなら、より一層ルイーーズは積極的で大胆であると思われる。

アンダソンは、このような行動力のある女性に対して、まだ若い男性のジョージに、自分の初めての体験への恐怖や自信のなさを隠させるために、あるいは、自信を取り戻さようと、饒舌にさせている。"A flood of words burst from George Willard."<sup>(48)</sup> そして、情事の相手ルイーーズ・トラニアンとの性体験によって、彼に自己中心的な男としての誇りだけを与えている。

On the sidewalk at the side of Winney's Dry Goods Store where there was a high board fence covered with circus pictures, he stopped whistling and stood perfectly still in the darkness, attentive, listening as though for a voice calling his name. Then again he laughed nervously. "She hasn't got anything on me. Nobody knows," he muttered doggedly and went on his way. (49)

しかし、このことについてライドアウト (Walter B. Rideout) は次のように述べている。

The sexual encounter with Louise has been simply that. It has brought him physical satisfaction and a feeling of entirely self-centered masculine pride. His expectation of hearing a voice, however, would seem to be a projection of guilt feeling at having violated the overt moral code of the community even though "nobody knows." (50)

ジョージ・ウィラードがライドアウトの言うように感じたのは、そこに、アンダソンの嫌うピューリタニズム的セックス観があったからであろう。ピューリタニズム的な考え方によれば、セックスとは恥ずかしいものであり、ある種の盗みの行為にも類するものであるが、アンダソンの手に一たびかかると、セックスとはコミュニケーションだという明るいものになるのだ。「誰にもわかりはしない」の中で、アンダソンは、当時のアメリカの片田舎にまだ残っている、古く固苦しい倫理意識を非難すると同時に、ルーイズ・トラニアンのような、何事にも捕われない自由で素直な人間がいても良いのではないかと訴えているように、私には思われる。しかも、男性を勇気づけ励ますことができるのは、粉れもなく女性なのだという考えが潜んでいるように思われる。

さて、「或る自覚」になると、ジョージ・ウィラードと相手の女性との関係は、「誰にもわかりはしない」よりも複雑なものとなっている。なぜなら、二人の間に他の男性が介入しているからだ。二人の男性と関わりのある女性ベル・カーペンター (Belle Carpenter) は、力強く男っぽい女性である。アンダソンは、ここでもジョージ・ウィラードに、ルーイズ・トラニアン同様、進歩的な女性に魅せられるように仕向けている。だが、まだジョージ・ウィラードは昔のまま、成長していないようだ。明らかに、彼の未熟な女性観が伺われる。

The pool room was filled with Winesburg boys and they talked of women. The young reporter got into that vein. He said that women should look out for themselves, that the fellow who went out with a girl was not responsible for what happened. (51)

ところが、次の部分からジョージが少し精神的に成長したことがわかる。

Hypnotized by his own words, the young man stumbled along the board sidewalk saying more words. "There is a law for armies and for men too," he muttered, lost in reflection. "The law begins with little things and

spreads out until it covers everything. In every little thing there must be order, in the place where men work, in their clothes, in their thoughts. I myself must be orderly. I must learn that law. I must get myself into touch with something orderly and big that swings through the night like a star. In my little way I must begin to learn something, to give and swing and work with life, with the law." (52)

アンダソンは、ジョージ・ウィラードをこのような心の高揚を経験するまでに成長させたにもかかわらず、まだ、彼を一人前にさせていない。それは、バル・カーペンターが自分に気があるのだと勝手に思い込むジョージ・ウィラードの態度や、その心の高揚をバル・カーペンターに打ち明けてしまっているところから明らかだ。

George Willard was full of big words. The sense of power that had come to him during the hour in the darkness in the alleyway remained with him and he talked boldly, swaggering along and swinging his arms about. He wanted to make Belle Carpenter realize that he was aware of his former weakness and that he had changed. "You'll find me different," he declared, thrusting his hands into his pockets and looking boldly into her eyes. "I don't know why but it is so. You've got to take me for a man or let me alone. That's how it is." (53)

そして、ついには訳のわからないことばを発している。

Again, as in the alleyway, George Willard's mind ran off into words and, holding the woman tightly he whispered the words into the still night. "Lust," he whispered, "lust and night and women." (54)

何と愚かなのだろう。結局、ジョージ・ウィラードは、自分よりもずっと男性的なエド・ハンドビー (Ed Handby) の粗野な暴力に屈伏せざるを得なかった。「誰にもわかりはしない」において、世間的道徳に違反したという罪の意識を感じたのと同じように、ジョージ・ウィラードは、敗北者の気持ちを作者によって味わわれている。こうしたジョージ・ウィラードの姿から、愛とは個人的屈辱と、自分自身の欠点について理解することをもたらすものだ、という作者のアイロニーが読み取れると思う。ここで初めて、アンダソンは女性のマイナス面を引き出しているようだ。これまでのところでは、女性とは母のように優しく、また何事にも負けない精神の強さを持ち、いわば崇拜すべき存在だというのが彼の考えであったようだ。しかし、バル・カーペンターを見る限りでは、女性とは男性を勇気づけてくれる女神的存在であると同時に、男性を失意のどん底に落とし入れる魔女的存在と言える。女性というものは、外の顔と内の顔の二つの顔を持ち、その外の顔によって包み隠された内の顔に気付かないまましていると、男性はとんだ目に会うぞ、男性諸君、気を付けたまえ、というアンダソンの優しい(?) 忠告が聞こえてくるようなエピソードではないかと思う。更に、ジョージ・ウィラードのように敗北した人間は、他のワインズバーグの人々と同じように、孤独を味わわなければならないのかもしれない。都会よりも田舎を、現在よりも過去を、"round perfect fruit" (55) よりも "twisted apples" (56) を



愛するアンダソンが、好きな女を自分のものにできなかった男の未熟さに同情を示したエピソードだと言えると思う。

しかし、「世間知」になると、ジョージ・ウィラードのこうした精神状態も、ほぼ大人のそれに近づくようになる。アンダソンは、その状態を次のように記述している。

There is a time in the life of every boy when he for the first time takes the backward view of life. Perhaps that is the moment when he crosses the line into manhood. The boy is walking through the street of his town. He is thinking of the future and of the figure he will cut in the world. Ambitions and regrets awake within him. Suddenly something happens; he stops under a tree and waits as for a voice calling his name. Ghosts of old things creep into his consciousness; the voices outside of himself whisper a message concerning the limitations of life. From being quite sure of himself and his future he becomes not at all sure. (57)

ジョージ・ウィラードがこうした自覚を抱くようになったのは、恋人ヘレン・ホワイト (Helen White) のおかげと言えるだろう。彼女は、自分の気持ちに忠実に行動したルーズ・トラニアン、子供をもて遊ぶような態度を示したベル・カーベーターとは多少違っている。自分の本当の気持ちを隠すために、わざと反対の態度を取るということは、幼い子供によくあることだが、まさに、ヘレン・ホワイトはそうした態度を示している。しかし、ジョージ・ウィラードの "Come on" (58) というたった一言で、ヘレン・ホワイトは完璧に素直になることができたのだ。今までのジョージ・ウィラードは、どちらかと言えば臆病だったが、ここでは堂々としているのはなぜだろう。それは、彼が様々な経験を通して、精神的に成長した成果だと言えるだろう。

He began to think of the people in the town where he had always lived with something like reverence. He had reverence for Helen. He wanted to love and to be loved by her, but he did not want at the moment to be confused by her womanhood. (59)

ジョージ・ウィラードをここまで成長させたヘレン・ホワイトの力とはいったい何だったのだろう。もちろん、二人が互いに好意を寄せていたこともその理由の一つだ。しかし、それだけではない。"sophistication"<sup>(60)</sup> という変化を迎えたジョージ・ウィラードの心の状態を、アンダソンは次のように描いている。

With all his heart he wants to come close to some other human, touch someone with his hands, be touched by the hand of another. (61)

こうした変化は、ヘレン・ホワイトにも起こっていた。つまり、二人とも誰か自分を理解してくれる人、ともに悩み苦しんでくれる人を求めていたのだ。しかも、お互いの相手がその欲望を満たす条件にぴったり当てはまっていたために、一瞬ではあるが、完全に相手を理解し、お互いに相通じ合うものを見つけ出すことができたのだ。

しかし、ヘレン・ホワイトは全ての人を理解できたわけではない。アンダソンは、「世

間知」以外でも、ヘレン・ホワイトと他の男性とのエピソードを描いている。それは、「内省的な少年」("The Thinker")と「酒」("Drink")においてである。前者ではセス・リッチモンド(Seth Richmond)が、後者ではトム・フォスター(Tom Foster)がそれぞれヘレン・ホワイトと関係がある。セス・リッチモンドもトム・フォスターも彼女に対して一方的な感情を抱いているにすぎず、その恋愛感情は、決して表面には表されていない。またヘレン・ホワイトの方も、未成熟なためなのだろうが、相手の真意をいっこうに把握しようとはしていない。

Although his acquaintanceship with Helen White, the banker's daughter, was outwardly but casual, she was often the subject of his thoughts and he felt that she was something private and personal to himself. (62)

He said that Helen White was a flame dancing in the air and that he was a little tree without leaves standing out sharply against the sky. Then he said that she was a wind, a strong terrible wind, coming out of the darkness of a stormy sea and that he was a boat left on the shore of the sea by a fisherman. (63)

では、アンダソンが、セス・リッチモンドでもトム・フォスターでもない、ジョージ・ウィラードをヘレン・ホワイトと結び付けたのはなぜだろう。ジョージ・ウィラードと二人の男性が違っている点は、大胆さが欠如しているという点だ。作者は、ヘレン・ホワイト自身を母や大学講師から逃げさせ、都会風な女性に仕立て上げようと考えている。また、幼少の頃は男の子にラブレターを送らせている。彼女がこのような大胆で進歩的な女性の都類に属する以上、恋人としての相手を選ぶ場合、大胆さの足りない男性には物足りなさを感じるはずだ。セス・リッチモンドは、自分の本当の気持ちを告白できずじまいになっているし、トム・フォスターも酒で自分の気持ちを紛らせている。両者とも、ヘレン・ホワイトのことを頭に思い浮かべるだけで満足し、実際の行動に移ろうとはしていない。いや、行動しようと思っても、純粋すぎるためにかえってできなくなってしまうのかもしれない。結局、作者は、精神的成長をしてきたジョージ・ウィラードに積極的態度を取らせることで、ヘレン・ホワイトに同種類の相手を与えたのだ。そして、彼女も、ジョージ・ウィラードによって、"sophistication"<sup>(64)</sup>というものを経験し、成熟した大人への仲間入りを果たしたのだ。

以上のことから、私はアンダソンの新しい女性観を発見することができた。恋人にすべき女性は、おとなしくて、自分を理解してくれる女性でなければいけないが、それだけではなく、自分が尊敬できる女性でなければならないというものである。人を尊敬すること、それは非常に素晴らしいことだ。しかし、裏を返せば、劣等感を自覚するということにもなり得る。この劣等感というものは、絶えずアンダソンの頭の隅に存在していたようだが、このことについては、後でもう少し詳しく述べることにしたい。

さて、『ワインズバーグ・オハイオ』を構成する女性達の中で、「冒険」のアリス・ハインドマンと「女教師」("The Teacher")のケイト・スィフト(Kate Swift)はかなり

重要である。二人とも一見しただけでは全く違う人物に描かれているようだが、その背後にある様々な要因をよく考えてみると、非常に似通っているように思われる。この二人の女性を詳しく分析してみることにしよう。

アリス・ハインドマンは、外面的に、エリザベス・ウィラードを代表とする虐げられた女性の型に属しているが、心の中に情熱を秘めた女性としての条件も備えている。

At twenty-seven Alice was tall and somewhat slight. Her head was large and overshadowed her body. Her shoulders were a little stooped and her hair and eyes brown. She was very quiet but beneath a placid exterior a continual ferment went on. (65) [下線筆者]

この「冒険」には報われない愛が描かれているのだが、主人公アリス・ハインドマンは、恋人ネッド・カリーの心変わりや深い挫折感を味わい、彼女は孤独な人となっている。アリス・ハインドマンという田舎娘に対してシカゴという都会の女達も登場するが、ネッド・カリーが彼女を捨てた動機はごく単純だ。田舎を出て都会に行つて一旗上げようという野望は、男なら誰でも持つものだろうし、都会には様々な誘惑——例えば女や酒——がごろごろしている。彼がアリス・ハインドマンのもとに帰つて来なくなるのも当然だ。このネッド・カリーを成功者とするならば、対するアリス・ハインドマンはあらゆる欲求不満の犠牲者だと言えるだろう。彼女は、恋人に捨てられたと心のどこかで悟りながらも、いつか恋人が必ず戻ってくると信じ続けている。その上、愛し愛されたいという欲望のあまり、愛を求めた彼女のもたえは、彼女自身にも理解できない狂おしい姿となって次のように表されている。

She wanted to leap and run, to cry out, to find some other lonely human and embrace him. On the brick sidewalk before the house a man stumbled homeward. Alice started to run. A wild, desperate mood took possession of her. "What do I care who it is. He is alone, and I will go to him," she thought; and then without stopping to consider the possible result of her madness, called softly, "Wait!" she cried. "Don't go away. Whoever you are, you must wait."

The man on the sidewalk stopped and stood listening. He was an old man and somewhat deaf. Putting his hand to his mouth, he shouted. "What? What say?" he called.

Alice dropped to the ground and lay trembling. (66)

ここまでの段階で、彼女は何と愚かな女性なのだろうと私は単純に考えた。しかし、次の描写で考えは一変した。

"What is the matter with me? I will do something dreadful if I am not careful," she thought, and turning her face to the wall, began trying to force herself to face bravely the fact that many people must live and die alone, even in Winesburg. (67)

何と哀れな女性だろう。結局、アリス・ハインドマンも他のワインズバーグの人々と同じように、自分の気持ちを押しさえつけ、じっと耐えていかなければならないのだ。

しかし、アンダソンはどのように彼女に耐える女を演じさせるのみで、例えば、ネッド・カリーの後を追わせるようなことはしなかったのだろう。それは、アンダソンの持論のせいなのだろう。ここでも、時代の流れに乗り切れずにいる人間は、結局は孤独という狭い部屋の中に閉じ込められなければならないのだ、というアンダソンの悲痛な叫びが感じられる。しかしながら、私は、一方ではアリス・ハインドマンを気の毒だと思うが、もう一方では、これほどまでに肉体的及び精神的忠誠、言い換えれば、一人の男性に、また自分の決意に忠実に生きて行く彼女の姿の中に、健気さと同時に力強さをも感じることが出来る。この力強さを念頭に置いてみると、孤独に耐え続けるアリス・ハインドマンには、アンダソンの母の面影を再び伺うことができるのではないだろうか。更には、ネッド・カリーの背後には、放浪癖が強く無責任なアンダソンの父の姿が認められるのではないかと私は思う。

アリス・ハインドマンのように、孤独に耐えるがために一見すると虚げられているようだが、実はその内部に女の底力を隠し持つ女性の逆のパターンが、ケイト・スイフトだと思われる。外面的には相当頼もしい女性——一時期、日本でもてはやされた「翔んでる女」風の女性——であるがために、周囲の人々の誤解を招いている。

Behind a cold exterior the most extraordinary events transpired in her mind. The people of the town thought of her as a confirmed old maid and because she spoke sharply and went her own way thought her lacking in all the human feeling that did so much to make and mar their own lives. In reality she was the most eagerly passionate soul among them... (68)

強く、全く満たされた個性を持ち、耐久力に優れ、自給自足が可能な女性としての外面的要素を十分に持つケイト・スイフトの神経は、実は外見とは全く裏腹に、非常にデリケートなものだ。例えば、ベンベヌート・チェリーニ (Benvenuto Cellini) の話を生徒達に聞かせてやったことは、一つの証明となるだろう。何もベンベヌート・チェリーニに限らず、他の彫刻家でも良さそうなのに、敢えてアンダソンが、この彫刻家を引き合いに出しているのはなぜか。それは、ベンベヌート・チェリーニの芸術作品の素晴らしさについて語られる時、その官能性という点で有名な彫刻家だったからだと思う。つまり、彼の名前を女教師ケイト・スイフトの口から言わせることで、作者アンダソンは、彼女の官能的あるいは性的欲求不満を暗示したかったのに違いない。彼女の外面に漂う冷静さ、あるいは強い個性というものは、こうしたフラストレーションをカムフラージュするための一手段にすぎないと言えると思う。

「冒険」のアリス・ハインドマンが、裸で雨の中を駆け回るといふ突飛な行動をしたのは、愛し愛されたいという欲求が、どっと溢れ出した結果の行動と言える。それとちょうど同じような動機、つまり、誰かに本当の自分を理解してもらいたいという欲望から、ケイ

ト・スイフトは教え子ジョージ・ウィラードのことを考えている。そして、彼女がジョージ・ウィラードに、自分は本当は物凄く孤独なのだということを理解させようと必死に試みる時、彼女の心の奥に潜んでいた欲求が一気に上昇して頂点に達し、急に表面に顔を出してきている。

Again Kate Swift talked with great earnestness. Night was coming on and the light in the room grew dim. As he turned to go she spoke his name softly and with an impulsive movement took hold of his hand. Because the reporter was rapidly becoming a man something of his man's appeal, combined with the winsomeness of the boy, stirred the heart of the lonely woman. (69)

She was a teacher but she was also a woman. As she looked at George Willard, the passionate desire to be loved by a man, that had a thousand times before swept like a storm over her body, took possession of her. In the lamplight George Willard looked no longer a boy, but a man ready to play the part of a man. (70)

しかし、ケイト・スイフトの欲求もアリス・ハインドマンと同じように、完全に満たされないままに終わってしまう。結局、孤独の状態に逆戻りさせられてしまったのだ。

孤独という部屋の中に再び押し込められてしまったという結末に至った二人の女性だが、その終わり方は、全く同じではなく、少し違いがあるように私は感じる。ケイト・スイフトを孤独の状態に引き戻したのは、カーティス・ハートマン牧師 (Reverend Curtis Hartman) なのだが、アリス・ハインドマンが自分の将来を自分の力で悟るほかなかったのに対して、ケイト・スイフトは、牧師という神に仕える人物によって悟られただけ、孤独の中にも救いの手が差し伸べられているように思われる。なぜなら、作者アンダソンは、周囲の人々から誰にも理解されない彼女の姿を神聖なものとして、この牧師の目にだけ映し出しているからだ。

Lying face downward she wept and beat with her fists upon the pillow. With a final outburst of weeping she half arose, and in the presence of the man who had waited to look and to think thoughts the woman of sin began to pray. In the lamplight her figure, slim and strong, looked like the figure of the boy in the presence of the Christ on the leaded window. (71)

「森の中での死」の老婆が、死ぬことによって救われたのと同じように、ケイト・スイフトは神に祈り、神の慈悲を乞い、神に懺悔することで救われたのだと思う。だからアンダソンは、彼女を "an instrument of God, bearing the message of truth"<sup>(72)</sup> に変えて、女性は、力というものが目に見えない体の奥底にあるために、たとえ満たされなくても、強く生きていけるのだということを暗示している。

もちろん、「神の力」 ("The Strength of God") の中では、カーティス・ハートマン牧師は神に関して視野が狭い人間として描かれているし、また、彼の一連の行動を通して、肉体を否定し、セックスを邪悪なものとする昔ながらの宗教観念に対するアイロニーをアンダソンは描いている。しかし、少し考え方を変えてみると、アリス・ハインドマンや

ケイト・スィフトが求めながら達成できなかった愛にせよ、またカーティス・ハートマン牧師が否定した愛にせよ、たとえその背後に肉体的欲求充足という希望が隠れていたとしても、それらの愛は、純真で繊細な心を持った人間だけが求めることのできる真実の愛であると思われるのだ。この真実の愛とは何なのか、というアンダソンの究極的な問いかけに対する答えは、「タンディ」(“Tandy”)の中に見られる。

タンディなる少女の父親トム・ハード (Tom Hard) について、アンダソンは次のように記述している。

He proclaimed himself an agnostic and was so absorbed in destroying the ideas of God that had crept into the minds of his neighbors that he never saw God manifesting himself in the little child that, half forgotten, lived here and there on the bounty of her dead mother's relatives. (73)

このような父から引き出された孤独を、少女は幼少ながらにもうすでに与えられている。作者アンダソンは、この孤独 — ワインズバーグのほとんどの人々に共通するもの — を克服する鍵を、この非常に短いエピソードの中に織り込んでいる。その鍵とは、人とコミュニケーションすることなのだ。そして、ここに登場する酒びたりの未知の男から、作者アンダソン自身の理想とする愛を発見することができる。

"I know about her struggles and her defeats. It is because of her defeats that she is to me the lovely one. Out of her defeats has been born a new quality in woman. I have a name for it. I call it Tandy. I made up the name when I was a true dreamer and before my body became vile. It is the quality of being strong to be loved. It is something men need from women and that they do not get." (74)

"Be Tandy, little one," he pleaded. "Dare to be strong and courageous. That is the road. Venture anything. Be brave enough to dare to be loved. Be something more than man or woman. Be Tandy." (75)

アンダソンが理想とする愛とは、現世の中で最も困難であり、挑戦的なことではあるが、真に英雄的な仕事なのだ。なぜなら、愛は力と勇気と無欲とを必要とし、あらゆるものを救済できる力となるからだ。この理想の愛は、彼が生きる社会の中では、もうすでに忘れられてしまっている。したがって、この愛をコミュニケーションすることができる人は「グロテスク」な人と言える。アンダソンは、少女を「グロテスク」な存在にするために、彼女の涙を流させている。この涙こそ、真実の愛を伝えるためには大きな勇気が必要だということを、表しているように思われる。

"I want to be Tandy. I want to be Tandy. I want to be Tandy Hard," she cried, shaking her head and sobbing as though her young strength were not enough to bear the vision the words of the drunkard had brought to her. (76)

以上のように、アンダソンは『ワインズバーグ・オハイオ』の中で様々な女性を描いてきた。進歩的な女性もいれば、保守的な女性もいる。いずれにせよ、彼女達は皆、何らかの形で孤独感を味わっているように思われる。こうした孤独な女性達の中に、アンダソンにとっての理想の女性が潜んでいる。例えば、郷里を出て行った男からの手紙を持つうちに年老い、醜くなった女性、放浪癖の強い夫を少しも恨むことなしに働き続ける母親、活動的な事業家ではなしに田舎びたつまらない男に、真実の価値を見出す若い女などだ。どうやらアンダソンは、都会へ出ることも時代の波に乗ることもない女性の中に、真実の価値を見出そうとしていたように思われる。彼にとっての黄金時代は、過去の田園生活にある。その過去の田園生活にこそ純粋な生き方があるとアンダソンは考えている。それを毒するのは、都会や商工業の発達なのだろう。しかし、犠牲がどれほど大きくても、純粋さを守り抜こうとすると、真実の生き方、真実の女性の姿があるのかもしれない。この犠牲は、文明の側からすれば貧しく、醜いものなのだろうが、その陰にこそ、真実があり、神秘的なものとなるに違いない。

新時代に毒されず、また、物質的に思われなくても、人間としての高貴さや威厳を保つ女性。そうした女性こそが、苦難の時代を救うのだというのが、アンダソンの意見である。そして、彼のこうした考えの結果が、『ワインズバーグ・オハイオ』という作品を産み出したのだ。

### § 3 実生活における女性達

シャーウッド・アンダソンは、生涯に四度も結婚している。その他M. D. F. と略して、彼が『シャーウッド・アンダソン覚え書』(Sherwood Anderson's Notebook, 1926)を献じている女性もいる。このM. D. F. は、インディアナポリス(Indianapolis)在住のミス・マリエッタ・D・フィンリー(Miss Marietta D. Finley)のことで、彼女はボブズ＝メリル出版社(Bobbs-Merril Publishing Company)に勤務していた。四人の妻と一人の別の女性という五人の女性達とアンダソンとの関係の内に、作家、及び人間としての彼を解明する一つの鍵がある。

シャーウッド・アンダソンの生活の歴史を眺めてみると、そこに「エーディプス・コンプレックス」の典型的な実例があることに気付く。アンダソンが幼児期において、母親になつき母親を愛し、父親に対しては反抗的態度を取ったことは、周知のとおりである。その後、普通の場合ならば、男子は母親に愛されたいという願望のために、母親の愛している父親のような人間にならなければいけないと考え、次第に父親に近づき、父親を模倣するものだ。ところが、アンダソン家においては、父親は家族を顧みないで飲酒にふける利己的な男であるために、夫婦間の精神的絆はなかった。したがって、アンダソンは父親を軽蔑し、母親を我が物にし、母親の愛だけを受けて育ったのは疑いの余地がない。それゆえに、彼は母親への依存性が強く、母親と自分とを同一視し、母親の考え方、感じ方、行

勤の仕方などをそのまま取り入れようとしたのだろう。この段階で、アンダソンのリビドー<sup>(77)</sup>はエーディプス・コンプレックスに達したと言えるのだ。彼が19歳の時に母親は他界したが、彼女の死は、彼にとって特に痛ましく、あたかも恋人が愛する妻と死別したかのように悲しみは大きかったに違いない。

母親に対して幼児的定着を持っている人間の恋愛感情における特徴を、大槻憲二は次の五つにまとめている。

- ① 彼等は既に思春期になっても、その対象を毅然二つに区別する。一方に於て、対象を高尚な、純潔な女として、それを性交と結びつけて考えるというような事は思いもよらないものとして考えると共に、他方に於てただ性欲の対象であるに過ぎない普通の女を認識すること。
- ② 彼等はその恋人に対して非常に忠実であって、決して恋人から離れられない心持を抱いているに拘らず、他方に於て幾多類似の恋愛事件を次から次へと惹起して行く傾向を持っていること。
- ③ 彼等は誰か所有者のある女に対して興味を持つ。その女と関係を結べば、必ず「横る第三者」のある如き、そういう女に対して強く引かされること。
- ④ 性的に悪い評判のある女に興味を持つこと。
- ⑤ そういう悪い評判や悪い境遇にある女を救うことに依って、その女を恋人とすること。<sup>(78)</sup>

こうした特徴を持ったアンダソンが、教養豊かなコーネリア・レインと恋愛結婚をしたのは、彼女に母親のイメージを求めたからであろう。しかし、結局彼は、大槻憲二の言う第二番目の特徴、「幾多類似の恋愛事件を次から次へと惹起して行く傾向を持っている」<sup>(79)</sup>のである。なぜなら、アンダソンは自分自身の不完全さを棚に上げておいて、完全な女の観念をもって恋愛に臨んでいるため、永久に自分の期待は満たされることがないからだ。

自分のリビドーがエーディプス・コンプレックスに定着していることを、アンダソンは意識していないので、離婚に対してはあまり罪の意識がなかったようだ。彼は自分の妻子に関して、次のように言った。

But I decided I'd had enough of all of them. Particularly my lovely wife, Cornelia. She'd been a school teacher, and she'd taught me to read books. But she got to insisting that I read the wrong ones, books without secrets in them. I didn't like the further schooling she had to offer. So I left them all.

And here I am, a happy man making a good living and waiting for people to wake up and recognize me as the best writer in America. <sup>(80)</sup>

妻を捨てた理由として、アンダソンが言っていることは理解できなくはない。それが教師であろうがなかろうが、このような女はもうたくさんだという気持ちになるだろう。一人の女——それがいかに教養豊かな素晴らしい女性であろうと——と一緒に暮らすには限度があるものだ。後に残るものは、ただ、忍従とあきらめである。嘘や偽りの人生は、解消



してしまうのが最上の策だ。幻滅を感じた生活の中に、何かが生まれて来る余地はもはやない。

こうして妻子を捨てたアンダソンは、すぐに別の女を愛している。人間は常に誰かを愛さずにはいられず、いつも新たな対象を求めるものだ。アンダソンも人並みの人間だったのである。彼の再婚の相手は、彼が『貧乏白人』を献じたテネシー・ミッチェルである。彼はコーニーリアと離婚してわずか四日後に、テネシーと結婚している。先妻コーニーリアは理知的であったので、アンダソンとテネシーとの関係を察知し、彼らの結婚を心から祝福したということだ。<sup>(81)</sup>ここで私は、コーニーリアの中にも、忍耐と自己犠牲の生涯を送ったアンダソンの実の母エマ・スミス・アンダソンの姿を見ることができる。

アンダソンがテネシーと結婚したのは、彼女と『スプーン・リヴァー詞華集』(Spoon River Anthology, 1915)の著者であるエドガー・リー・マスターズとのスキャンダルが表面化したので、彼女を守るための手段だったのだ。ここで、テネシーに対するアンダソンの恋愛態度が、大槻憲二の言う第四番目と第五番目の特徴に当てはまることに気が付くだろう。しかし、テネシーの結婚生活は、今度もアンダソンの利己主義のために失敗に終わった。彼女は1924年1月、仕方なく離婚を承諾した。その後、彼女は再婚しなかったという。しかし、アンダソンの方は、すでにエリザベス・プロールと恋愛中であった。

アンダソンの三度目の結婚相手となったエリザベス・プロールに、彼は『ター——中西部の子供』を献じている。結局エリザベスとも離婚することになったアンダソンは、妻となった三人の女性に関して、1929年1月16日付のファーディナンド・シェヴル(Ferdinand Schevill)宛ての手紙で、次のように書いている。

I only mean that poor E. is very, very nice--much nicer than I will ever be--and I do not want her any more. C. and T. were nice too. Why should I not face myself--a wanderer. (82)

この手紙からは、E. (エリザベス・プロール)とC. (コーニーリア・レイン)とT. (テネシー・ミッチェル)という三人の女性に対するアンダソンの同情とも理解できそうな内容を認めることができる。しかし、彼の自責の念は読み取れないようだ。

エリザベスとの離婚理由は、アンダソンが彼女の水準に合わせるができなかったためなのだ。なぜなら、エリザベスもコーニーリアと同様に、理知的で、しかも世話好きで、包容力があつたからだ。こうした要素がなぜ離婚に結び付くのか。それは、アンダソンにとってそういう女性は、彼の幼年時代に一家の支柱として家族を養い、子供達に限りない愛を与えた、まさに実母的存在でなければならぬという考えを持っていたためだ。つまり、アンダソンはエリザベスにも、やはり母親のイメージを無意識的に追い求めていたために、破局を招いたのに違いない。

しかし、アンダソンが離婚に踏み切った背後には、四度目の妻となったエリナー・コペンハイヴァーとの熱烈な恋が隠されている。アンダソンが彼女に献じたのは、『回想録』だが、これは彼の遺言によるものである。エリナーは社会的意識の強い女性で、アンダソ

ンもまた、自らの幼年期を振り返った時、有能な馬具製造業者であった父親から仕事を奪い取った時代の趨勢、つまり農本主義から機械工業による資本主義を憎まずにはいられず、社会主義ないし共産主義に次第に傾斜していった。エリナーとアンダソンは南部の工場を多く訪れ、労働者やストライキをしている人達を励ましたそうだ。(83) アンダソン自身がエリナーと同じ目的意識を抱いていたために、彼女との結婚生活は、彼の過去のそれらと比較してみると、最も有意義で心に強りのあるものだったに違いない。しかし、彼女に様々なことで勇気づけられて、執筆に精を出していたアンダソンを見ると、彼のリビドーが依然としてエーディプス・コンプレックスの段階に定着しているので、無意識に母親のイメージをエリナーにも求めていたのではないかと思われるのだ。

アンダソンにとっての五人目の女性マリエッタ・D・フィンリーに宛てた彼の書簡は、1917年から1930年代にかけて約 300通あり、その内容は主に、彼の結婚や妻や子供や著書に関するものである。

I am trying with all my might to be and remain a lover. All this writing is addressed to my beloved.

I am writing these snatches of things to women, to all women, to one woman. I am telling her of my life, of a man actively engaged in the grim wrestle of modern industrial life.

The wrestler is myself. I tug and pull at my opponent, Reality. Sweat rolls from me. Occasionally I cry out with pain.

My woman is made up of all the women in the world. She is no longer young nor is she old. She is beautiful.

You have something of that woman in you. All women have. (84)

Tennessee will be with me in New York in September and later I shall come west for a month or two. (85)

I have seen almost no one ... Tennessee is here and we go often in the afternoon on sightseeing trips. I plan to write long weekly letters to the children about the city and get notes during these trips. (86)

(Tennessee) and I went (from Chicago) last Sunday for the day with the children (in Michigan City, Ind.). Robert had made a puppet theater that was really wonderful. In the late afternoon when the light failed they gave a show. It was a strikingly nice thing they had done. All the family seemed happy. Mimi (aged 7) has begun to pass out of infancy and become a little girl. It seems to me that Cornelia is happier and is learning better how to handle her life. (87)

これらの手紙を例としてマリエッタ・D・フィンリーとアンダソンとの関係を考察してみると、次のようなことが言えるのではないかと私は思う。まず第一に、アンダソンがマリエッタに宛てた 300近い手紙を単純に計算してみると、二週間に一通の割合で手紙を書いたことになることに気が付くだろう。これほどまでに多くの手紙を書くのは、恋人があるいは最も信頼した友人でなければ考えられないことだ。第二に、アンダソンのリビドーがエーディプス・コンプレックスの段階に定着していることを忘れてはいけない。第三に、

彼のリビドーがエーディプス・コンプレックスの段階にあるとすれば、当然のことながら、彼の恋愛態度は大槻憲二の言う五つの特徴の中のいずれかによるものと考えられる。第四は、アンダソンがマリエッタに『シャウッド・アンダソン覚え書』を献じていることだ。この献呈にあたって、彼女の名前をM. D. F. と略してフル・ネームで表していないところを見ると、人目を避けていたのではないかと思われる。最後に、マリエッタに宛てたアンダソンの約 300通に近い書簡が、主として彼の結婚や妻や子供達や著書に関するものであるということは、重要なポイントのように思われる。

以上のような事柄から判断してみると、アンダソンのマリエッタに対する恋愛態度は、おそらく大槻憲二の言う特徴の第一番目の傾向があるのではないだろうか。すなわち、アンダソンは彼女に対して高尚な純潔な女性として、それを性交と結び付けて考えるというようなことは思いもよらないものとして考えているのではないだろうか。アンダソンとマリエッタの関係は、ちょうどアンダソンの著書『卵の勝利』の中の一編「兄弟たち」("Brothers")に登場する職工長とアイオワ州出身の女性との関係と似ている。すなわち、アンダソンはマリエッタに愛を感じながらも、ある一線までは近づくがそれ以上は接近していないのだ。接近しようと思ってもそうできないのである。なぜなら、アンダソンにとってマリエッタは、手の届かない、まるで夜空に美しく輝く星のような存在だからだ。あるいは、マリエッタもアンダソンにとって、自分を見守ってくれる母親的存在であったためなのかもしれない。しかし、いずれにしても、精神的には夫婦関係以上の絆が一方的に、アンダソンからマリエッタに向けられていたと思われるのだ。

アンダソンの弟子にあたるヘミングウェイも四度結婚した。一見、安易に離婚、結婚を繰り返したかに見える。愛し得る対象は無数だが、結婚は一人である。また、結婚は現実であるが、恋愛は夢であると言えるだろう。しかし私小説作家にとって、恋愛は経験であり実験でもある。『日はまた昇る』(The Sun Also Rises, 1926)では、登場人物達の愛は不毛で、彼らは皆癒し難い深い傷を負っている。『武器よさらば』(A Farewell to Arms, 1929)のフレデリック・ヘンリー(Frederick Henry)とキャサリン・バークレー(Katherin Barkley)との愛も美しく哀しい。ヘミングウェイにおける愛は、全てが痛ましく私には感じられるのだ。愛の不毛の時代に生きる人間の哀しみは深い。それだけに、ヘミングウェイの愛はいずれも真実であり、嘘や偽りが無いと思われる。

ところが、このヘミングウェイの師たるアンダソンの愛は、何となく胡散臭く感じられる。しかも、自己中心的で、一方的であり、女性は献身というものを提供する者という位置を与えられているにすぎない。つまり、相手の傷を癒そうとする優しい愛は、彼にはほとんど見られない。しかし、彼と結婚した四人の女性達も、いわゆるプラトニック・ラブ(Platonic love)を経験した一人の女性も、誰も彼を憎んではいなかった。いや、憎めなかったのだろう。その理由は、アンダソンのリビドーがエーディプス・コンプレックスに定着しているがために、彼には優柔不断の影があり、彼女達に劣等感を感じていたためであろう。言い換えれば、彼の内部には常に、甘えの要素が存在していたからであろう。

この甘えとは、母親への依存を意味していると思われる。

こうしてアンダソンは、生涯、一つのテーマを固執し続けた。すなわち、アンダソンは精神的には母親と夫婦関係にあったが、彼女の他界を区切りに、無意識のうちに、64年の生涯を終えるまで、母親のイメージを負い求めていたのだ。彼にとって母の存在は、あまりに大きなものだった。その大いなる存在の母へ献げたのが『ワインズバーグ・オハイオ』であった。

TO THE MEMORY OF MY MOTHER,  
EMMA SMITH ANDERSON,  
whose keen observations on the life about her first awake  
in me the hunger to see beneath the surface of lives,  
this book is dedicated. (88)

生涯求め続けた母への思いがその背景にあったからこそ、『ワインズバーグ・オハイオ』は素晴らしい作品になり得たと思うのである。

## 結 語

シャーウッド・アンダソンが理想と定めた女性は、実際に存在するのだろうか。おそらく、そういう女性は発見しにくいだろう。存在不可能と潜在的に認識する一方で、無意識のうちにもそうした女性を求めたのは、彼の現実の世界に対する幻滅があまりに大きかったためだろう。自分自身の高等教育の欠如や教養不足に劣等感を抱いていたアンダソンは、そうした自分の持ち得ないものを所有する革新的な女性を求めた。しかし、そこにアンダソンの成長不足——すなわち実母への思慕——が潜んでいたにせよ、現実の世界に生きる革新的な女性に惹かれながらも、彼の理想であった母親像を同時に現実の世界に求めて挫折を繰り返した。このような現実への幻滅のために、彼は非現実、つまり、夢の世界へ逃げ込もうとしているのだ。アンダソンの夢について、ホフマン (Frederick J. Hoffman) は次のように述べている。

Dreams are for Anderson the most coherent expression of his other world. Dream fragments are the facts of the world of fancy. They are the means by which Anderson flees reality; most often, they are simply wish-fulfillments, with the artist playing a heroic role and gaining in fancy what he has failed to get in actual life. (89)

アンダソンが現実社会からの逃避を望んで入って行った夢の世界は、「グロテスクなものについての書」の老作家が思い描いた夢とも現実ともつかぬ世界に等しい。また、「タンディ」において、アンダソンが訴えようとした真実の愛も、この夢の世界にのみ存在するとと言えるだろう。アンダソンは、自分が触れてきた様々な人々の生活や思想を、小説と

いう架空の世界の中で復元することで、自分自身をも夢の世界に入り込ませ、「真理」("truths")<sup>(90)</sup>を獵もうとしているのだ。彼の作品に登場する女性達も皆、男性に虐げられ、孤独に耐えながらも、それぞれの生き方において、結果的には男性を救う役割を演じて、「真理」を獵もうとしている。この「真理」に近づくことができるのは、夢の世界、または小説という架空の世界に生きる者だけに許されることなのだろう。

現実世界に生きる人間の社会は、あまりに変化が目まぐるしく、生きて行くにはなかなか不都合な場所だ。しかし、空想の世界では、自分の勝手気ままな振舞いが可能だ。だから、ついどうしても空想の世界に走り、その中に没入したいと思ってしまう。しかし、人間は生きて以上必ず、いつかは現実と直面しなければならない時を迎えるはずだ。アンダソンは、こうした現実社会を真正面から見据えることを恐れていたのだろう。けれども、彼は現実と非現実とのギャップを埋めようと、痛ましいほどの努力を試みている。その努力は『ワインズバーグ・オハイオ』の中に集められている。だが彼自身も、その登場人物達と同様、現実と夢とを区別する大きな壁にぶつかっていたのだ。ワインズバーグの人々は、誰もがその壁を打ち破ろうとしても打ち破れずに、「グロテスク」な存在と化してしまっている。アンダソンも、壁を打ち破れずに終わっている。だが、彼は「グロテスク」な存在にはならなかった。なぜなら、アンダソンはワインズバーグの人々と違って、孤独ではなかったからだ。

彼には妻がいた。子供もいた。信頼できる友人もいた。そして、何よりも母がいた。彼がこの世に生まれてから死ぬまで、彼と母は常に一緒だったのである。アンダソンは母への畏敬の念と哀れみとを、絶えず心に抱いていたのだ。彼女を苦しめた物質文明、出世主義、商業主義など、人間を均質化していく様々な社会の流れを、アンダソンは否定し憎んだ。こうした態度には、俗に言う「マザー・コンプレックス」が感じられ、近代文明と対決する男性的な力強さは見当らない。

アンダソンは近代社会と対立しながらも、新しい文明に毒されまいとした。それは、明らかに消極的ではあるが、彼はのちの作家達に大きな影響を与えた。例えば、生活態度の面ではフォークナー (William Faulkner, 1897-1962) に、文体や構成の面ではヘミングウェイに影響を与えた。更に、性を書いたことに関して、ミラー (Henry Miller) の先駆者的存在と言えるだろう。こうした影響の源となっているのは、彼の持つ想像力の純粋さだと思う。そしてその純粋さは、時代を超越して価値のある数々の作品を生み出しているのだ。なぜなら、アンダソンは新しいヨーロッパ教養を自分のものにした — つまり、アメリカ的なものに変えた — からである。したがって、彼は次の世代への橋の役割を果たしたと言える。文学史全体にとって、彼の存在は重要なのだ。

以上のことから、アンダソンが、機械工業以前の社会への復帰を主張し、人間性の回復を望み、人と人との真のつながりを求めたことがよくわかった。彼の訴えが、人間の普遍性に呼びかけたものであるだけに、時代に押し流されることなく、いつまでも読者の心に深い感動を与えるに違いないと私は思うのである。

## 使用テキスト・参考文献

### [テキスト]

- (1) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, ed. Ray Lewis White, The Press of Case Western Reserve University, 1968.
- (2) Anderson, Sherwood, Sherwood Anderson's Memoirs, ed. Kichinosuke Ohashi, Rinsen Book Co., 1982.
- (3) Anderson, Sherwood, The Portable Sherwood Anderson, ed. Horace Gregory, Penguin Books, 1977, Rev. ed., 1981.
- (4) Anderson, Sherwood, Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferris, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966.
- (5) Brautigan, Richard, Trout Fishing in America, Laurel Printing, 1972, 14th ed., 1983.

### [翻訳書]

- (1) シャーウッド・アンダソン『アンダソン短編集』(Anderson, Sherwood, "The Egg," "Brothers," "The Other Woman," "I Want to Know Why," "Unlighted Lamps," "Sad Horn Blowers," "The Man Who Became a Woman," "Death in the Woods," "A Meeting South," "The Corn Planting"), 橋本福夫訳, 新潮社, 1976.
- (2) シャーウッド・アンダソン『ワインズバーグ・オハイオ』(Anderson, Sherwood, Winesburg, Ohio), 橋本福雄訳, 新潮社, 1959.
- (3) シオドア・ドライサー『アメリカの悲劇』(Drieser, Theodore, An American Tragedy), 大久保康雄訳, 新潮社, 1960.
- (4) シオドア・ドライサー『シスター・キャリー』(Drieser, Theodore, Sister Crie), 小津次郎訳, 研究社, 1959.
- (5) ギュスタフ・フローベル『ボヴァリー夫人』(Flaubert, Gustave, Madame Bovary), 世界文学全集12, 伊吹武彦訳, 河出書房, 1962.
- (6) アーネスト・ヘミングウェイ『武器よさらば』(Hemingway, Ernest, A Farewell to Arms), 大久保康雄訳, 新潮社, 1955.
- (7) アーネスト・ヘミングウェイ『日はまた昇る』(Hemingway, Ernest, The Sun Also Rises), 大久保康雄訳, 新潮社, 1955.
- (8) ヘンリック・イブセン『人形の家』(Ibsen, Henrick, A Doll's House), 世界文学全集26, 杉山誠訳, 河出書房, 1962.
- (9) デイヴィッド・ハーバート・ロレンス『息子と恋人』(Lawrence, David Herbert, Sons and Lovers), 世界文学全集38, 伊藤正訳, 河出書房, 1960.
- (10) ギュイ・ド・モーパッサン『女の一生』(Maupassant, Guy de, Une Vie), 世界文学全集16, 杉捷夫訳, 河出書房1960.

- (11) ユージン・グラッドストーン・オニール『楡の木陰の欲望』(O'Neill, Eugene Gladstone, Desire Under the Elms), 井上宗次訳, 岩波書店, 1951.

[参考書 — 洋書]

- (1) Asselineau, Roger, "Language and Style in Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 345-356.
- (2) Burbank, Rex, Sherwood Anderson, College & University Press, 1964.
- (3) Cowley, Malcolm, "Introduction to Winesburg, Ohio," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 357-368.
- (4) Faulkner, William, "Sherwood Anderson: An Appreciation," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 487-494.
- (5) Frank, Waldo, "Emerging Greatness (Review of Windy McPherson's Son)," in Sherwood Anderson: A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 13-17.
- (6) Frank, Waldo, "Winesburg, Ohio After Twenty Years," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 369-376.
- (7) Fussell, Edwin, "Winesburg, Ohio: Art and Isolation," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 383-395.
- (8) Geismar, Maxwell, "Sherwood Anderson: Last of Townsman," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 377-382.
- (9) Gelfant, Blanche Housman, "A Novel of Becoming," in Sherwood Anderson: A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 59-64.
- (10) Gregory, Horace, "An American Heritage," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 301-308.
- (11) Hicks, Granville, The Great Tradition, Biblio and Tannen, 1967.
- (12) Hoffman, Frederick J. "Anderson and Freud," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 309-320.
- (13) Howe, Irving, Sherwood Anderson--A Biographical and Critical Study, Stanford University Press, 1951.
- (14) Huberman, Leo, We, the People, Monthly Review Press, Rev. ed., 1947.  
(小林良正, 雪山慶正訳『アメリカ人民の歴史(上)(下)』, 岩波書店, 1954.)

- (15) Jones, Howard Mumford, "Introduction to Letters of Sherwood Anderson," in Sherwood Anderson; A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 139-149.
- (16) Kazin, Alfred, On Native Grounds, An Interpretation of Modern American Prose Literature, Harcourt, Bace and Company, 1942, Chapter 8. pp. 162-180.
- (17) Lawry, Jon S., "'Death in the Woods' and the Artist's Self in Sherwood Anderson," in Sherwood Anderson; A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 120-138.
- (18) Lindroth, James R., Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio (Monarch Notes), Monarch Press, 1966.
- (19) Lovett, Robert Morss, "The Promise of Sherwood Anderson (Review of The Triumph of the Egg)," in Sherwood Anderson; A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 65-69.
- (20) Modlin, Charles E., Sherwood Anderson; Selected Letters, The University of Tennessee Press, 1984.
- (21) Morison, Samuel Eliot, The Oxford History of the American People, 1965. (西川正身訳『アメリカの歴史2, 3』, 集英社, 1971.)
- (22) Phillips, William L., "How Sherwood Anderson Wrote Winesburg, Ohio," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 263-286.
- (23) Rideout, Walter B., "Introduction," in Sherwood Anderson; A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 1-11.
- (24) Rideout, Walter B., "The Simplicity of Winesburg, Ohio," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 287-300.
- (25) Spencer, Benjamin T., "Sherwood Anderson: American Mythopoeist," in Sherwood Anderson; A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 150-165.
- (26) Thurston, Jarvis A., "Technique in Winesburg, Ohio," in Winesburg, Ohio, Text and Criticism, ed. John H. Ferres, The Viking Critical Library, The Viking Press, 1966, pp. 331-344.
- (27) Whipple, T. K., "Sherwood Anderson," in Sherwood Anderson; A Collection of Critical Essays (TCV), ed. Walter B. Rideout, pp. 87-100.

[参考書 — 和書]

- (1) 有賀 貞, 大下尚一『概説アメリカ史』, 有斐閣, 1979.
- (2) 広瀬あつ子 "シャーウッド・アンダソンの研究". 大妻女子大学英文学会 OTSUMA REVIEW No. 13. (1980), pp.148-161.



- (3) 本間長世『新しい女性像を求めて』（世界の女性史10 アメリカⅡ），評論社，1977.
- (4) 井上龍二『講座英米文学史』第11巻（小説Ⅳ），大修館書店，1981.
- (5) 小林千枝子“Death in the Woods By Sherwood Anderson”，上智大学英文学会第10号，（1968），pp.70-72.
- (6) 小林富久子『アメリカ文学のなかの女性』，成文堂，1985.
- (7) 小平卓保，河井田研朗『聖書思想事典』，三省堂，1981.
- (8) 小園敏幸“Sherwood Anderson と5人の女性”，梅光女学院大学英語英文学会『英米文学研究』第17号，（1981），pp.133-151.
- (9) 松田 卓“Sherwood Anderson における女性像”，札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』Vol.16, No.1,（1982），pp.1-8.
- (10) 宮本陽吉『アメリカ最終出口』，冬樹社，1980.
- (11) 宮本陽吉『アメリカ小説を読む』，集英社，1977.
- (12) 西川正身，福原麟太郎『英米文学史講座』第11巻（20世紀Ⅱ），研究社，1961.
- (13) 大橋古之輔『アンダスンと三人の日本人』，研究社，1984.
- (14) 大橋古之輔『20世紀英米文学案内8』，研究社，1968.
- (15) 大槻憲二『愛慾心理学総論篇』，育文社，1971.
- (16) 高田賢一“『ワインズバーグ・オハイオ』における壁のイメージ”，宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』27号，（1979），pp.86-97.
- (17) 宇佐見英治『彫刻とはなにか』，日貿出版社，1980.
- (18) 安河内英光“Sherwood Anderson's 'Death in the Woods'”，九州大学大学院英文学研究会 CAIRN No.11,（1968），pp.53-71.

[映 画]

- (1) A Place in the Sun (Montgomery Clift/Elizabeth Taylor), produced and directed by George Stevens, Paramount Movie, 1951.
- (2) Carrie (Laurence Olivier/Jennifer Jones), produced and directed by William Wyler, Paramount Movie, 1951.

[脚 注]

- (1) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, Book I, Note I, P.5.
- (2) Ibid., Book I, Note I, P.6.
- (3) Ibid., Book III, Note III, P.226.

- (4) Anderson, Sherwood, Sherwood Anderson's Memoirs, Book III, I, pp.197-199.
- (5) Anderson, Sherwood, "The Book of the Grotesque," Winesburg, Ohio, P.45.
- (6) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, Book II, Note II, P.117.
- (7) スタインは、27 rue de Fleurus in Parisに住んでいた。  
(The Portable Sherwood Anderson edited by Horace Gregory, p.429.)
- (8) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, Book IV, Note I, pp.260-261.
- (9) Asselineau, Roger, "Language and Style in Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio," Sherwood Anderson; Winesburg, Ohio, Text and Criticism, P.353.
- (10) Anderson, Sherwood, "Men and Women," The Portable Sherwood Anderson, pp.429-430.
- (11) Hicks, Granville, The Great Tradition, pp.233-234.
- (12) レイモンド・カーバー (Raymond Carver) が次のように言っている。  
Anderson's best work is still good. He might have penned his own epitaph when he wrote, "I have written a few stories that are like stones laid along the highway. They have solidity and will stay here."  
— Carver, Raymond, "The New York Times Book Review"
- (13) "Clyde Enterprise," November 9, 1982, quoted in 宮本陽吉『アメリカ小説をよむ』, p.53.
- (14) 宮本陽吉『アメリカ最終出口』, p.14.
- (15) Anderson, Sherwood, "Paper Pills," Winesburg, Ohio, p.55.
- (16) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, Book I, Note I, p.8.
- (17) Ibid.
- (18) Howe, Irving, "The Short Stories," Sherwood Anderson—A Biographical and Critical Study, p.166.
- (19) Anderson, Sherwood, "Death in the Woods," p.413.
- (20) Ibid., p.415.
- (21) Anderson, Sherwood, "Hands," Winesburg, Ohio, p.48.
- (22) Anderson, Sherwood, "Death in the Woods," p.417.
- (23) Ibid., p.423.
- (24) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, Book I, Note I, pp.11-12.
- (25) 次の記述から、以上のような考えを導くに至った。「オリーブの実からとれる油は、穀物・ぶどう酒とならんで、神が民に恵む主要食品の一つである。油は、神の祝福の徴と考えられており、これにこと欠くことは不忠実にたいする神罰を、これを豊かに恵まれることは救いを意味する。オリーブの油が神の祝福の徴であ

れば、常緑のオリーブの木は、神に祝福された義人と、律法を通じて義と幸福の道を教える神の知恵の象徴とされる。また、燭台の上の七つの燈火皿があり、二本のオリーブの木がこれに灯油を供給するのだが、この木は二人の“油の子ら”、すなわち王と大祭司という二人の神に注油された者を象徴している。また油は流動的であり浸透性をもつがゆえに、香油が人の心を魅了し喜ばせることも手伝って、油は愛・友情・兄弟的相合はどの美しい象徴として使用される。さらに油は喜びと同じよに、人の顔を輝かせるところから、喜びの象徴ともされる。したがって、人の頭に油を注ぐとは、当人に歓喜と幸福を祈り、また友情と尊敬の徴を贈ることを意味する。」— 小平卓保、河井田研朗『聖書思想事典』，pp.26-27.

- (26) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, Book I, Note I, p. 8.
- (27) Anderson, Sherwood, "The Book of the Grotesque," Winesburg, Ohio, P. 45.
- (28) Howe, Irving, "A Fair and Sweet Town," Sherwood Anderson—A Biographical and Critical Study, pp.11-12.
- (29) Anderson, Sherwood, "The Book of the Grotesque," Winesburg, Ohio, P. 44.
- (30) Ibid.
- (31) Anderson, Sherwood, A Story Teller's Story, Book I, Note I, P. 8.
- (32) Anderson, Sherwood, "Death in the Woods," p. 420.
- (33) Ibid., p. 421.
- (34) Anderson, Sherwood, "Mother," Winesburg, Ohio, p. 58.
- (35) Ibid., p. 64.
- (36) Anderson, Sherwood, "Paper Pills," Winesburg, Ohio, p. 54.
- (37) Anderson, Sherwood, "Mother," Winesburg, Ohio, p. 64.
- (38) Ibid., p. 58.
- (39) 「エーディアス・コンプレックス」とは、息子が母親に対して無意識に抱く性的な思慕のことを指すが、この場合は、母親から息子に対しての思いなので、「逆の形」と言えると思う。
- (40) Ibid., pp.63-64.
- (41) Thurston, Jarvis A., "Technique in Winesburg, Ohio," Sherwood Anderson; Winesburg, Ohio, Text and Criticism, p.342.
- (42) Anderson, Sherwood, "Death," Winesburg, Ohio, p. 220.
- (43) Ibid., p. 221.
- (44) Cowley, Malcolm, "Introduction to Winesburg, Ohio," Sherwood Anderson; Winesburg, Ohio, Text and Criticism, pp.367-368.
- (45) Anderson, Sherwood, "The Philosopher," Winesburg, Ohio, p. 70.
- (46) Ibid.

- (47) Anderson, Sherwood, "Nobody Knows," Winesburg, Ohio, p.75.
- (48) Ibid., p.76.
- (49) Ibid., p.77.
- (50) Rideout, Walter B., "The Simplicity of Winesburg, Ohio," Sherwood Anderson; Winesburg, Ohio, Text and Criticism, p.297.
- (51) Anderson, Sherwood, "An Awakening," Winesburg, Ohio, pp.180-181.
- (52) Ibid., p.182.
- (53) Ibid., pp.184-185.
- (54) Ibid., p.185.
- (55) Anderson, Sherwood, "Paper Pills," Winesburg, Ohio, p.57.
- (56) Ibid.
- (57) Anderson, Sherwood, "Sophistication," Winesburg, Ohio, p.227.
- (58) Ibid., p.231.
- (59) Ibid., p.233.
- (60) Ibid., p.228.
- (61) Ibid., p.227.
- (62) Anderson, Sherwood, "The Thinker," Winesburg, Ohio, p.140.
- (63) Anderson, Sherwood, "Drink," Winesburg, Ohio, p.212.
- (64) Anderson, Sherwood, "Sophistication," Winesburg, Ohio, p.228.
- (65) Anderson, Sherwood, "Adventure," Winesburg, Ohio, p.119.
- (66) Ibid., pp.125-126.
- (67) Ibid., p.126.
- (68) Anderson, Sherwood, "The Teacher," Winesburg, Ohio, p.164.
- (69) Ibid., p.165.
- (70) Ibid., p.166.
- (71) Anderson, Sherwood, "The Strength of God," Winesburg, Ohio, p.158.
- (72) Ibid., p.159.
- (73) Anderson, Sherwood, "Tandy," Winesburg, Ohio, p.147.
- (74) Ibid., p.149.

- (75) Ibid.
- (76) Ibid., p.150.
- (77) 全ての行為の隠れた動機をなす根源的欲望を指す。
- (78) 大槻憲二『愛欲心理学總論篇』, pp.81-82.
- (79) Ibid.
- (80) Hecht, Ben, Letters from Bohemia—Recollections of Sherwood Anderson, H. L. Mencken, Gene Fowler, Charles McArthur, and others, p.88, quoted in Suguru matsuda (松田卓)「Sherwood Anderson における女性像」, 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』Vol.16, No.1, (1982), p.3.
- (81) 小園敏幸「Sherwood Anderson と5人の女性」, 梅光女学院大学英米文学会『英米文学研究』, 第17号, (1981), p.140.
- (82) Sherwood Anderson; Selected Letters edited by Charles E. Modlin, p.103.
- (83) 小園敏幸「Sherwood Anderson と5人の女性」, p.146.
- (84) "Letter from Anderson to H. D. Finley, 1916."
- (85) "Ibid., August 1918."
- (86) "Ibid., September 1918."
- (87) "Ibid., January 1919."
- (84)~(87) いずれも小園敏幸「Sherwood Anderson と5人の女性」, p.147.より引用
- (88) Anderson, Sherwood, Winesburg, Ohio, p.40.
- (89) Hoffman, Frederick J., "Anderson and Freud." Sherwood Anderson; Winesburg, Ohio, Text and Criticism. p.312.
- (90) Anderson, Sherwood, "The Book of the Grotesque," Winesburg, Ohio, p.45.